

本庄市の養蚕と製糸

—養蚕と絹のまち本庄—

2 0 1 2

本庄市教育委員会

序



本庄は江戸時代に中山道の宿場町として繁栄し、二つの市^{いち}をひかえた物流の拠点でありました。我が国が鎖国を解き横浜が開港すると、養蚕や製糸は急速に発達し、蚕種^{さんしゅ}や生糸^{せいしと}は輸出の主要産品として注目されました。我が国の近代を支えた養蚕と製糸やその流通において、本庄市の果たした役割には非常に大きいものがあります。

本市児玉町所在の競進社模範蚕室^{きょうしんしゃ}は、近代的な養蚕を伝習^{でんしゅう}するための教育施設であり、養蚕家屋の模範となった建物であるところから県指定文化財となっております。また、本庄旧市街に位置する旧本庄商業銀行煉瓦倉庫^{れんが}は、繭^{まゆ}の流通にかかる近代的な建造物として国登録有形文化財となっております。かつては市内の至るところで目にすることのできた、桑畑が広がり養蚕家屋が建ち並ぶ懐かしい風景は、まさにこの地域の近代の風景にほかならないものでした。

本書は、本庄市の礎^{いしづえ}となった養蚕と製糸の営みを再確認し、本市の繁栄を支えた歴史に思いを馳せるとともに、失われつつある先人の営みの一端を記録して郷土学習の資料として作成したものであります。本書が市民の皆さまはもとより教育にたずさわる皆さまに、我が郷土「本庄市」を理解するためのご参考になりえるならば幸いと存じます。

平成24年3月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

競進社模範蚕室



埼玉県指定文化財 競進社模範蚕室

競進社模範蚕室の内部

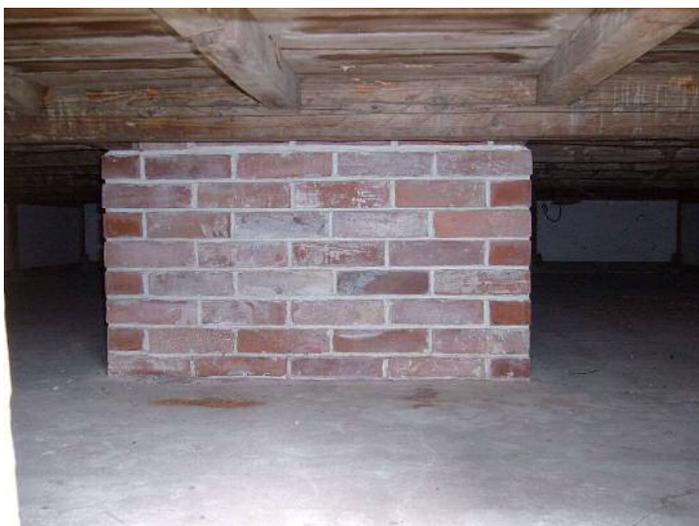


床下の吸気口

ここより新鮮な空気を床下に取り入れ、各部屋中央に設けられた炉（火鉢を置く空所）より室内に空気を導いている。

模範蚕室床下の煉瓦積みの炉

室内の床には三つの開口部があり、二つが煉瓦積みの炉（内側が漆喰仕立）で、もうひとつが床下にオープンになっている。床下には吸気口が設けられており、煉瓦積みの炉と炉の間に設けられた開口部から新鮮な空気が室内に導入された。



蚕室内の蚕棚

蚕室内に蚕棚を復元した。模範蚕室は4部屋が連節されており、一部屋には80枚から90枚前後の蚕籠が設置出来た。



競進社模範蚕室の中二階部

通常この部分は蚕の飼育には使用せずに、上簇等に使用した。小間返しの天井部（写真では床にあたる）は下に敷く菰の枚数で寒暖を調節した。またこの所でロープにより高窓の開閉ができた。



模範蚕室の高窓 小ぶりの高窓4基がこの蚕室の外観の特徴となる。



旧本庄商業銀行煉瓦倉庫（本庄市銀座）



上、鉄製の窓



中右、二階の小屋組み 木製トラス構造



右下、一階の様子



蚕蛹供養塔（大正院境内）



産業教育発祥の地碑（児玉町児玉）

現代の養蚕 金屋稚蚕共同飼育所と飼育風景



金屋稚蚕共同飼育所（J Aひびきの）（本庄市児玉町金屋）



宮内の桑園

本庄市児玉町宮内地区の桑園。

農家での養蚕

吊り下げられた回転まぶし。



市内の代表的な養蚕民家



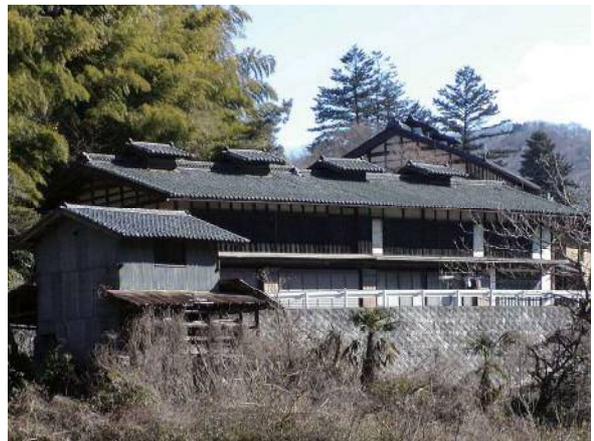
児玉町飯倉の養蚕民家
高窓を3基乗せる近代養蚕住宅である。



児玉町小平の養蚕民家
出桁構造を持つ住宅。



新井の養蚕民家
大型の養蚕住宅。



児玉町太駄の養蚕民家
高窓を4基持つ大型養蚕住宅。



宮戸の養蚕民家
高窓荷も小間返しの床を持つ内部4層構造の養蚕住宅。右は瓦葺の屋根の勾配が強い民家。



小和瀬の養蚕民家



傍示堂の養蚕民家

高窓は総ヤグラを乗せる養蚕住宅。右の民家は長大でかつ背が極めて低い。



仁手の養蚕民家

高窓は総ヤグラを乗せる養蚕住宅。右の民家は長大でかつ背が極めて低い。



児玉町保木野の養蚕民家

高窓を2基乗せる民家。



児玉町小平の養蚕民家

高窓2基と右側に大きな下屋を持つ民家。



久々宇の蚕室

専用の蚕室。高窓を2基持つこの規模の蚕室が郡内には比較的多くみられた。



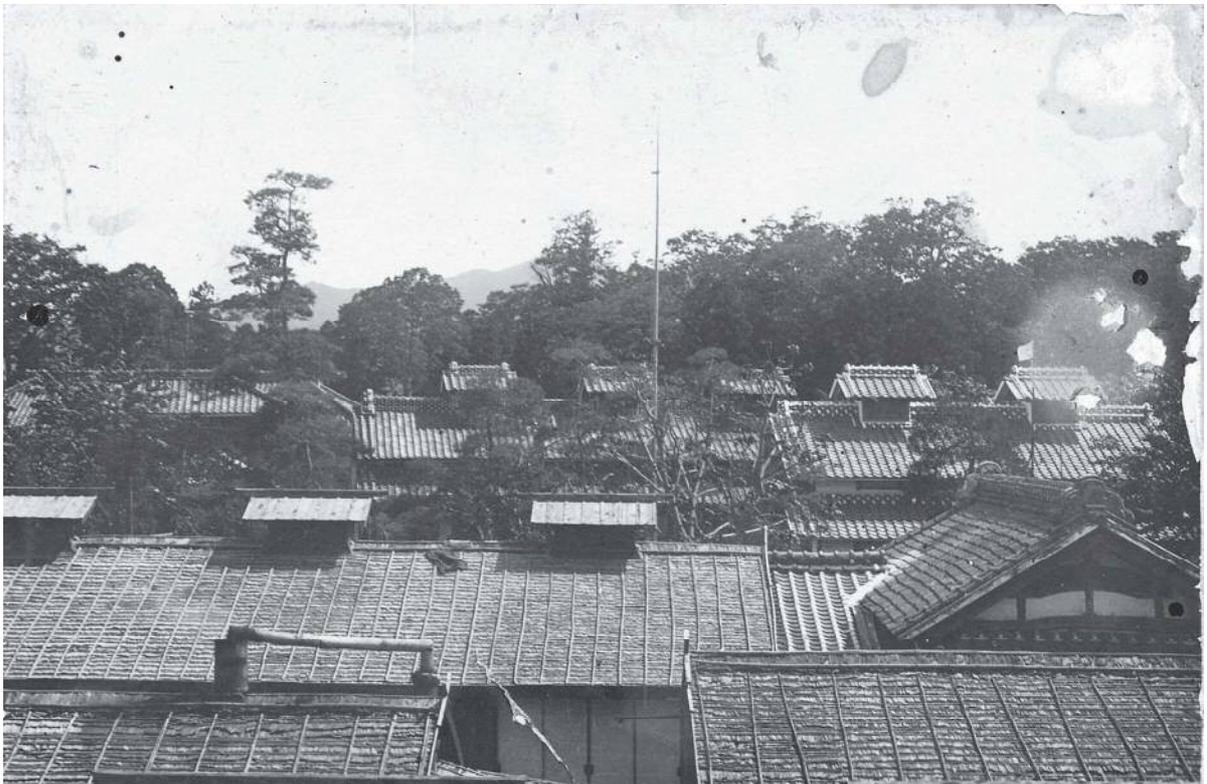
児玉町小平の蚕室

専用の蚕室。高窓を2基持つこの規模の蚕室が郡内には比較的多くみられた。

競進社

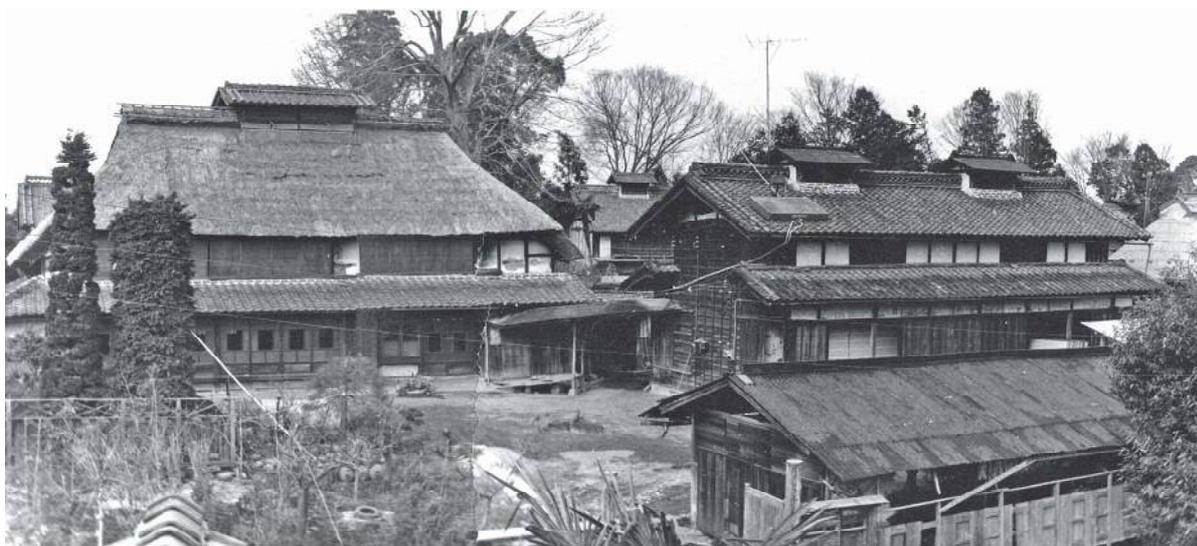


開設当時の競進社伝習所。明治17年に児玉町（現本庄市）に設けられた。

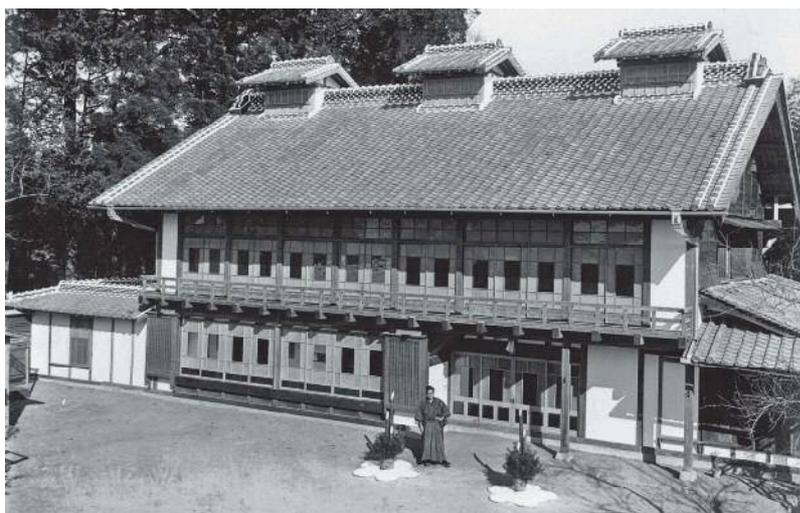


昭和期の競進社と競進社蚕業学校。手前が伝習所時代の建物。向こう中央が模範蚕室。上写真の煙突状の換気口が下写真では高窓にかわっている。

昔の養蚕農家



児玉町金屋の養蚕住宅と蚕室。母屋は瓦葺に改造されて現存する。蚕室は取り壊された。



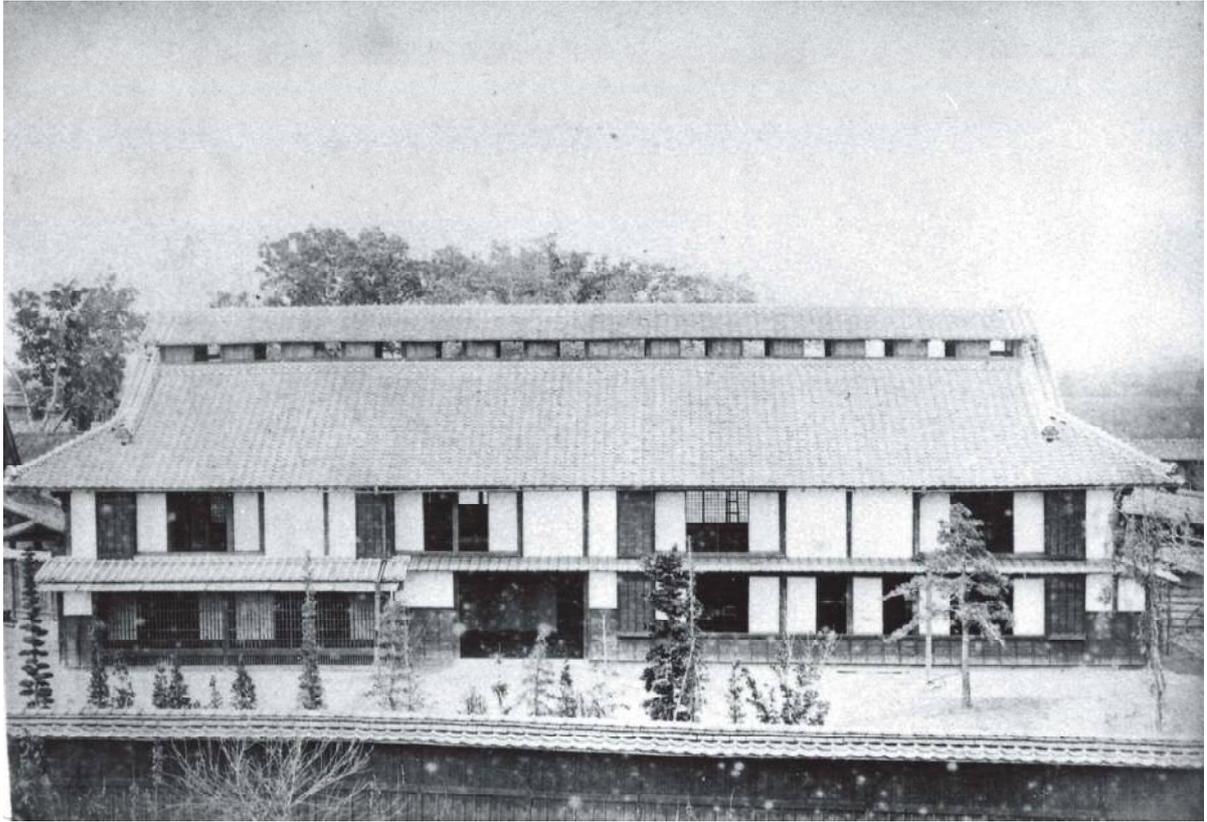
鶴森の近代養蚕住宅

高窓を3基乗せる大型の養蚕住宅だったが現存しない。



仁手の大型養蚕住宅

現在は屋根の瓦の葺き替えで高窓は撤去された。



明治初年の久米六右衛門家蚕室。入母屋造り総ヤグラを持つ大型の蚕室。上州島村の田島弥平家蚕室との関係が想定される。現存しない。



共和稚蚕共同飼育所

昭和40年の建築。現存しない。

本泉稚蚕共同飼育所
現在は文化財収蔵庫として使用している。



昭和2年（1927年）の養蚕風景



金屋村金屋（現本庄市児玉町金屋）の養蚕農家

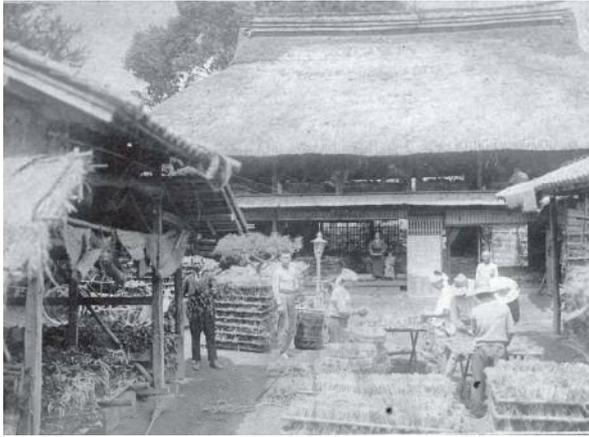


撮影地不詳（金屋付近か）の養蚕農家



撮影地不詳（金屋付近か）の養蚕農家

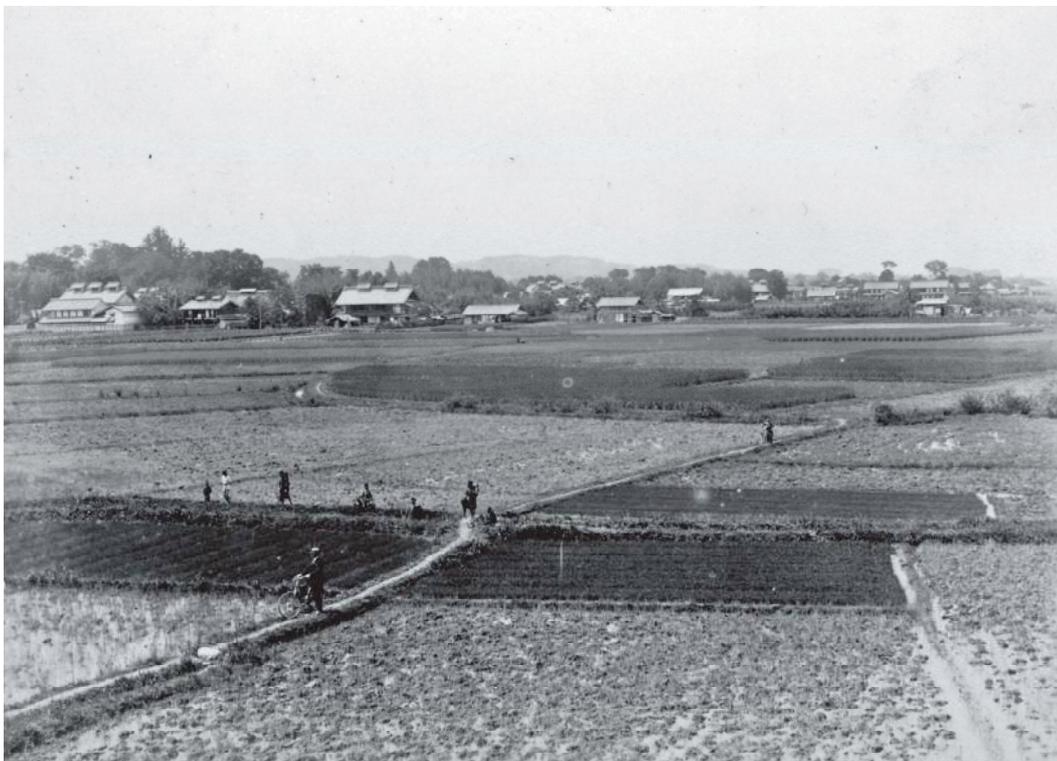
この一連の写真は、昭和2年に養蚕教師が長瀨町の萩原写真館を連れて撮影した記録。撮影地は一部ははっきりとしないが、秩父郡長瀨町内から山を越えて児玉郡に移動し、当時の金屋村地内の金屋・飯倉・田端や秋平村秋山などで撮影している。



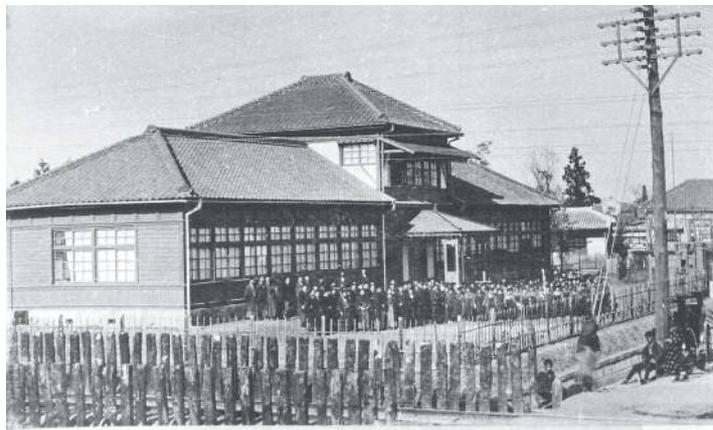
左は金屋村飯倉の養蚕農家、右は金屋村金屋の養蚕農家。



左は金屋村田端の養蚕農家、右は不明。



撮影地不詳。養蚕農家遠景。高窓を乗せた民家が多く見える。

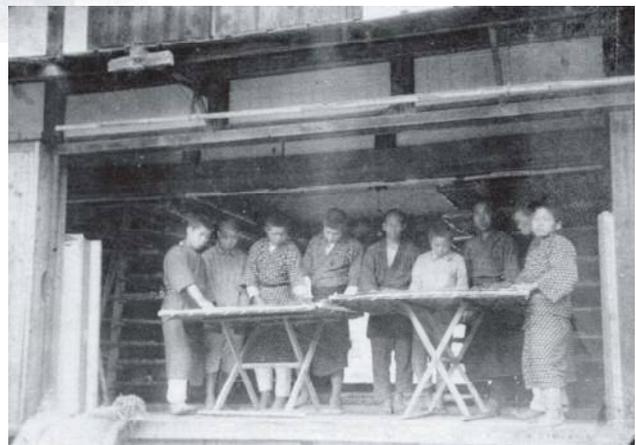


蠶病豫防事務所

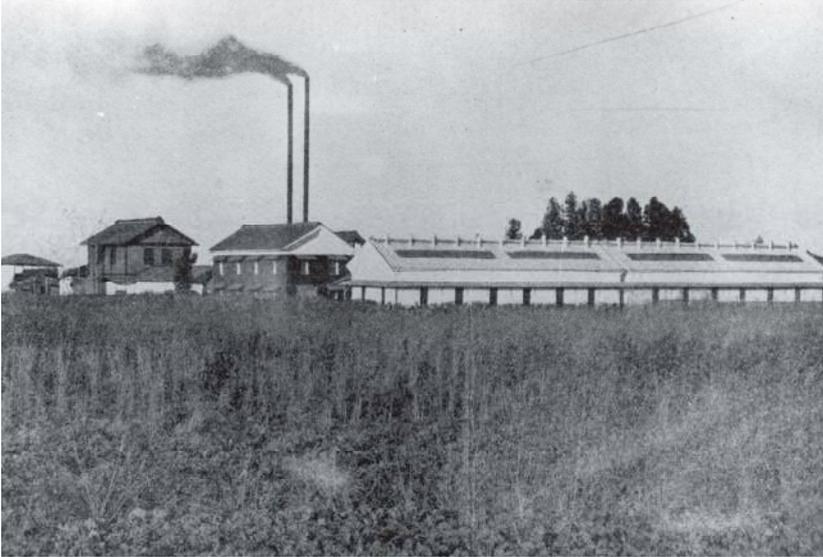
五畝館 本庄市宮戸の金井家
蚕種業を行っていた。
明治43年の撮影。

蚕病予防事務所
旧市民プラザ南側にあった。
手前は現在の高崎線。

児玉の仲町にあった蚕玉館
浅見分教場の実習風景

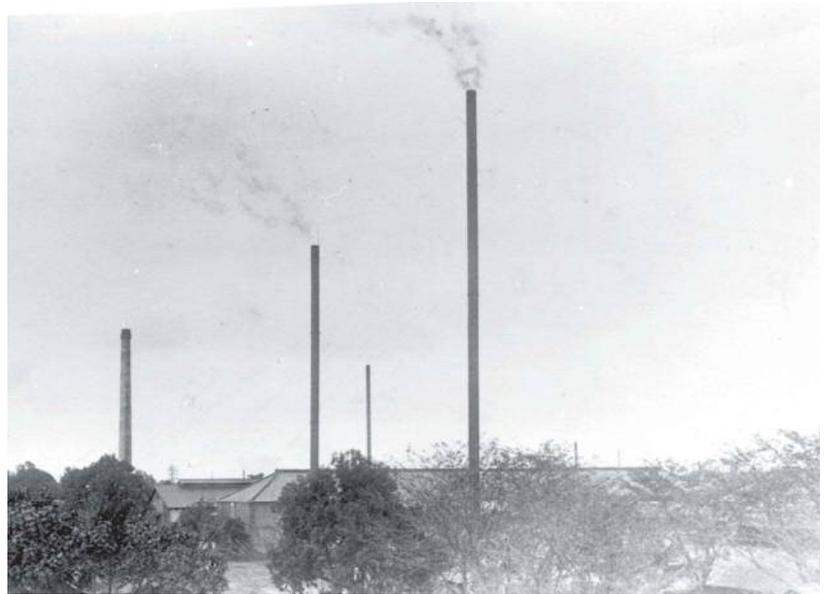


製糸業の隆盛



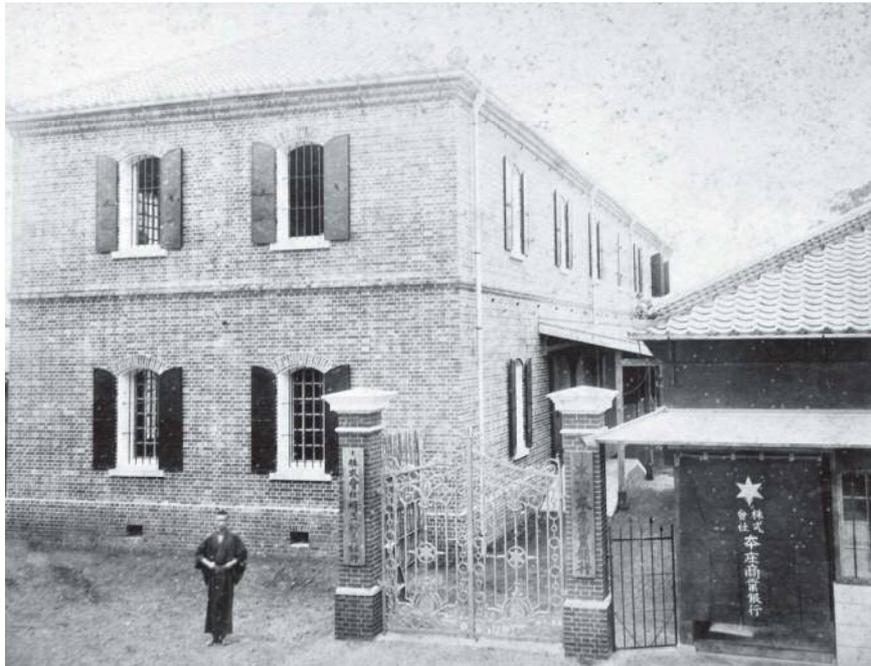
大星館製糸場（大正2年）

昭栄製糸株式会社本庄工場
（昭和12年）



製糸工場の内部

本庄商業銀行と煉瓦倉庫



煉瓦倉庫

右側が本庄商業銀行



武州銀行本庄支店

本庄商業銀行は武州銀行に合併された。
左に煉瓦倉庫が見える。

目 次

序

口絵

はじめに	1
1. 養蚕の歴史	3
江戸時代の養蚕	
日本の開国と養蚕業の隆盛	
2. 養蚕改良と競進社	5
一派温暖育と競進社模範蚕室	
-競進社模範蚕室の成立-	
木村九蔵と競進社	
競進社と高山社	
3. 養蚕業の隆盛	10
養蚕	
秋蚕事件	
県令白根多助と吉田清英	
4. 蚕種業の隆盛	12
江戸時代の蚕種製造	
蚕種業の盛衰	
本庄市の蚕種業者	
茂木小平の活躍	
5. 盛んなりし頃の養蚕地帯	14
高窓の里	
養蚕の風景	
特徴のある養蚕民家	
農村の風景	
近代養蚕住宅の増加	
6. 繭市場の発展	18
本庄商業銀行と煉瓦造倉庫	
横浜で活躍した生糸売掛商野沢正三郎	
7. 本庄の製糸業	21
製糸業の発展	
座繰製糸	
日本鉄道の開通と器械製糸工場の進出	
8. 養蚕信仰	23
繭玉飾り	
蚕蛹供養塔	
おわりに	24
参考文献	

本庄市の養蚕と製糸

－ 養蚕と絹の町本庄 －

はじめに

わが国の近代という時代の歴史を紐解く時、養蚕と製糸業の果たした役割の大きさに驚かされる。しかしながらその実態についてはあまり関心がもたれていないのである。

本庄市にとって、養蚕・蚕種・製糸という業種はそれぞれ時代の中心にあって、町の繁栄をもたらした極めて重要な産業であり、多くの人たちがこれら業種に少なからずかかわってきたという歴史がある。現在、低価格な中国産繭の進出や化学繊維の発達等様々な理由で急激に養蚕業が衰退したことにより、蚕種・製糸業も同様に衰退し、養蚕を行っている農家は平成23年度にはわずかに1軒までに減少し、蚕種業者や製糸工場は皆無という状況に至っている。

養蚕は、かつて群馬県・長野県・福島県・山梨県などともに埼玉県はその中心地であり、特に埼玉県の北西部に位置する本庄市は県内の養蚕の一大中心地を占め、現在でも高窓(越屋根)を乗せた大型養蚕民家を見ることができる。

大正2年(1913年)に刊行された『埼玉県産業案内』(埼玉県編)には県内の養蚕地として次の様に記されている。

「児玉郡青柳村及児玉町地方は、県下に於いて最も進歩したる養蚕地にして、模範とすべき養蚕家亦尠ならず、而して同郡仁手村藤田村及秩父郡大宮町樋口村等には大養蚕家多く、入間郡は各地方と秋蚕盛んなり」とある。文中にある児玉町・仁手村・藤田村はともに現在は本庄市に含まれ、埼玉県内では児玉・秩父・入間の三郡、つまり県西から県北部が一大養蚕地帯であったことがわかる。

しかしながら隆盛を極めた養蚕業も急激に衰退していき、かつてどこでも見られた桑園・桑畑はほとんど見るできなくなった。本庄地域と児玉地域は共に江戸時代より続く繭の集荷市場と賑わってきた。明治初年よりの繭の需要の増大は養蚕改良普及の動きを推し進め、隣村新宿村に結成された養蚕改良競進組は、児玉町に事務所と伝習所を設けて養蚕改良競進社となり全国より生徒を受け入れ、また全国に養蚕教師を派遣するなど、近代の養蚕改良の中心地になり、日本の養蚕業の発展



数段に吊るされた回転まぶし



繭の出荷で賑わう大正時代の本庄町

に大きな役割を果たした。

蚕種業は江戸時代末期にヨーロッパで発生した微粒子病の大流行により、ヨーロッパの蚕種が大打撃を受け、微粒子病に感染していない日本や中国の蚕種が人気となり高価格で盛んに輸出され、日本の蚕種業が隆盛となったが、その後、ヨーロッパにおける微粒子病の克服、国内の蚕種の感染、さらに輸出増に伴う粗雑種の増加や生産過剰等により蚕種輸出が急激に減少し、蚕種業界は大打撃を受け衰退に向かった。関東地方の利根川の両岸の地域はその氾濫源であり稲の栽培に不適な地域が多く、特に中流域の群馬県南部と埼玉県北部地域は、桑の栽培には適していたことから、大規模な養蚕農家が多かった。これらの農家の多くが蚕種の製造を手掛け、大規模な養蚕兼用の住宅と専用の蚕室を建てて、大量の蚕種製造を行っていた。現在でも本庄市の北部の宮戸地区・小和瀬地区は隣接する伊勢崎市の島村新地地区と同様に高窓を乗せた大型養蚕住宅が多く残っている。

製糸業は、群馬県と埼玉県は座繰製糸が盛んであり、組合製糸として発展した。長野県内では早くから大規模な器械製糸が導入されたが、群馬県西部で結成された、甘楽社や碓氷社などの組合製糸が埼玉県にも影響を及ぼし、本市の南西部の座繰製糸地域もこの2社の組合製糸に参加するものが多かった。埼玉県でも埼玉社を結成してその組織化を推し進めている。

明治16年(1883年)に上州方面の絹糸輸送のため日本鉄道(現JR高崎線)が整備開通すると、本庄駅の開業とともに、周辺的一大養蚕地帯を抱える本地域に器械製糸工場が進出し始めた。以後、本庄・深谷・熊谷の県北地域は一大製糸工場地帯となり、多くの絹糸が生産され横浜に運ばれている。

このように、かつて本庄市は養蚕・蚕種・製糸とも極めて盛んであり、市内には埼玉県指定文化財である競進社模範蚕室が現存し、さらに大量の繭を担保として収納するために建設された旧本庄商業銀行煉瓦倉庫(国登録文化財)も残されており、あわせて本市における養蚕・蚕種・製糸について、その歴史や変遷などを辿っていくこととする。



図-1 明治後期の児玉郡内の町村略図

1. 養蚕の歴史

○江戸時代の養蚕

養蚕は今から数千年も前に中国で始まったとされる。しかしながら日本に伝えられたのは弥生時代頃という。しかしながら本格的に日本に導入されたのはもっと遅くなり日本各地に養蚕が広まるのは7～8世紀頃と思われる。それは税として各地から絹糸布が収められているからである。しかしながら限られた需要のもと、日本各地で本格的に蚕が飼育されるのはさらに遅れて江戸時代まで待たねばならない。それまでは支配者階級が求めた絹は高級品種の絹であり、それは中国から輸入されており、まだ国産の絹が海外に出ることはなく国内の限られた需要を賄っているのみであった。

江戸時代も半ばを過ぎ、国内の情勢が安定し、絹の需要が飛躍的に増加すると、藩の特産品として養蚕が保護・奨励されるケースが増加し、国内各地での飼育農家が増加している。江戸時代末期にはかなりの生産額を生みだすようになった。

本市内でも江戸時代中期には児玉村の絹商人と江戸の間屋との間で、反物の寸法をめぐる争いが起きるなど、養蚕の増加を示す史料が現れてくる。

天明年間(1780年代)の秩父市に残る地方史料の中に「武州上州市場御領主様並郡付」というものがあり、群馬県・埼玉県・東京都の46ヶ所の市場が記載されている。(表①)

表①によれば市内では本庄宿で5000疋、八幡山(八幡山町と児玉村の市)で15000疋の絹が取引されていた。これでは本庄宿の取引量が少ないように見えるが、本庄宿では絹・太織以外にも糸5000貫に真綿5000貫の取引があり、総取引量は他の市に負けていない。当時の市は戦国時代に関東で開かれていた六斉市(月に6度開かれる市のこと。たとえば2・7の六斉市の場合は、2日・7日・12日・17日・22日・27日の6回となる)を引き継いでいる。本庄宿の場合

は2・7、八幡山の場合は八幡山町5・8、児玉町は3・10であった。このことから天明年間において相当量の養蚕が行われており、各地の市場で盛んに取引が行われていたことがわかる。

江戸時代後半の地方文書にも、質地証書類に畑地の取引証文が多く残されているが、いずれの畑も四方桑の記載がみられ、まだこの時代には桑園という畑全面に桑を植えるケースはまだ現れてこないが、多くの畑の周囲に桑が植えられ、多くの農家が養蚕を行っていたことが窺える。

地方文書の一つの村明細帳は江戸時代の村の様子を今に伝えてくれるが、村明細帳には養蚕の記載はごく簡潔に記載されている。

宝暦10年(1760年)の秋山村・風洞分(現本庄市児玉町秋山)の村明細帳には、「当村蚕少々宛仕候」、明和4年(1767年)の児玉村の明細帳には「女稼之儀者蚕少々仕絹織出申候」とある。翌年の八幡山町明細帳でも「蚕分限に応じ仕候」とある。寛政12年(1800年)の牧西村の村方往還明細帳には「女者蚕仕絹木綿少々宛織申候」とあり、幕末期の安政5年(1858年)の入浅見村明細帳では「蚕少々仕候」とある。基本的に江戸時代後期を通じて各村方の蚕に関する記述は似たようなものとなっていて、必ずしも実態は伝えていない。

八幡山町と児玉村は町場を形成するが、町民の多くは原則的に身分は百姓であり、商いは行ってもそれぞれ田畑を所有していて、町屋の二階で養蚕を行っていた。風洞分や入浅見村は村部に位置し養蚕の盛んな地域と言える。明細帳は時期的には江戸中期から後期にかけての記載であるがいずれも余り記載に変化は見られない。幕末期にはかなり養蚕が盛んになっていると推定されるが記載に変化がないのは、養蚕が本業(稲作)のさし障りとならない事を示すため、さらに

表① 天明年間の市
(「武州上州市場御領主様並郡付」より)

市	現在	絹(疋)	太織(疋)
高崎	群馬県高崎市	30,000	1,000
藤岡	群馬県藤岡市	50,000	1,000
鬼石	群馬県藤岡市	10,000	
本庄	埼玉県本庄市	5,000	1,000
渡瀬	埼玉県神川町	16,000	
八幡山	埼玉県本庄市	15,000	1,000
熊谷	埼玉県熊谷市	15,000	
寄居	埼玉県寄居町	20,000	500
野上	埼玉県長瀨町	2,000	
大宮	埼玉県秩父市	30,000	1,000

養蚕の稼ぎが収奪の対象とならないようにしたのではないかと思われる。また児玉村や牧西村の記載にあるように、女性が主として行っていることと、絹織物を織っている事が書かれている。これは自ら繭から糸を引き、織物を織っていた事を示している。この場合の織物は反物として絹商人に販売していたと思われる(かつてどこの農家にも一台の機織り機が残っていた)。この他、史的には桑の売買を示す史料も若干あり、特に文政4年(1821年)の八幡山町割元名主の福田褒克の日記には、「3月22日と25日の夜に大霜となり、赤堀下より伊勢崎・本庄・藤岡辺り一円で葉物が痛み赤くなってしまった。この害を逃れた八幡山町・児玉・風洞・秋山・小平・宮内辺りも3月26日の蚕掃き立てのあと、皆霜の害を受けてしまった。そのため桑を玉蔵寺から少々買い取り、さらに秋山村の寺からも買い取ったという。この様な事は蚕を始めて四~五十年以降初めてのことだとしている。桑が高値となり、上州の五料の方から風洞分まで桑を買いに来ているとしている。この時の蚕は当初、桑もたくさん食べ大当たりと見られていたが、実際は大外れとなり、やっと半蚕くらいになったという」。この日記によれば福田家は少なくとも安永・天明年間頃から養蚕を行っていたことになる。幕末期に至っては蚕種関係の史料も散見されるようになる。明治5年(1872年)には八幡山町の割元名主の福田礼藏は栗原熊吉から蚕種150枚を200両にて購入している。

○日本の開国と養蚕業の隆盛

安政6年(1859年)、黒船の来航以後、日本は開国へと大きく動いていった。

日本が開国し横浜が外国貿易の拠点となると、多くの新進気鋭の商人たちが横浜に集まり、外国人相手にしのぎを削った。隣町出身の原善三郎は亀屋を開いて横浜港最大の商人となった。また本市域の八幡山町(現本庄市児玉町八幡山)出身の野沢正三郎(庄三郎)は野沢屋商店を開いて大活躍をしている。

この頃の日本の輸出品は、生糸・絹糸・蚕種・茶であり、外貨獲得に多大な貢献をしている。当然ながら、明治新政府は外貨獲得のため養蚕業を奨励し、色々な施策を行い、各県の県令・県知事も県内の養蚕業の育成に尽力した。

日本の輸出品として生糸・蚕種が珍重されると、生産地では増産の必要性が生まれ、養蚕を行う農家の数が飛躍的に増加していった。また、ヨーロッパにおける養蚕の先進地であるイタリアやフランスで、蚕病が大流行したことにより、日本製の蚕種の輸出が急激に増大し、各地で大規模な蚕種業者が生まれることになる。蚕種の需要増大にともなう業者の乱立、大量生産は粗製乱造などの問題を抱えながらも明治6~7年頃がピークとなった。以後、ヨーロッパでの微粒子病が鎮静化すると、輸出の需要が減少し、蚕種の生産も減少していくことになった。蚕種は国内需要が中心となり、生糸が輸出の中心となり増大していった。

江戸時代末期には中山道本庄宿は周辺の村より集められた繭や生糸の市場が賑わっていたが、明治維新以降、さらなる市場の賑わいを見せ、明治5年に群馬県富岡に官営富岡製糸場が設置され、さらに同16年(1883年)に日本鉄道が開業するに及んで、本庄の繭市場は最盛期を迎えた。



製糸場に持ち込まれる繭

2. 養蚕改良と競進社

○木村九蔵と競進社

養蚕改良とその伝習・教育に生涯をかけた木村九蔵は、弘化2年(1845年)、上野国緑野郡高山村(現在の群馬県藤岡市高山)に高山寅蔵・さよの五男として生まれ、幼名は巳之助と名付けられた。高山家は代々名主をつとめた家であったが、決して裕福ではなかった。父寅蔵は、早々に次男長五郎に家督を譲り多胡郡日野村(現在の藤岡市日野)に隠居した。安政4年(1857年)、13歳の少年であった巳之助は、兄長五郎の言いつけで父の手伝いをする傍ら、試みにこの



明治末期頃の競進社

隠居家の二階で養蚕を行ったところ、大人たちが養蚕に失敗(違蚕)したのに彼の蚕だけがよく育ち立派な繭が取れたことが、後の養蚕改良の原点になったものと思われる。巳之助少年は、次の年も兄長五郎とともに自宅で養蚕を行ったが、よい繭を収穫することはできなかった。木村九蔵の養蚕改良の歴史はこうして始まった。どうしたらよい蚕が育ち、なぜ違蚕が生じるのかという疑問を解決するために、問題意識をもって養蚕改良を繰り返した。後に、隠居所では一階で父が日常的に火を焚いており、兄とともに養蚕を行った実家自宅では大きな部屋で陰湿な環境であったことが、蚕の生育の違いとなって現れたことに思い至ったのである。この頃は、安政6年(1859年)長い鎖国を経て横浜が開港し、貿易の主力産品として生糸や蚕種が位置づけられ、養蚕業が一躍脚光を浴びていた時期であった。養蚕業は、繭の販売を前提とした商品生産であり、また家内制の座繰製糸の発達と相まって農民層の意識も急速に近代化を遂げており、養蚕業はまさに明治期の花形産業となっていた。

九蔵(巳之助)は、廃家となっていた木村勝五郎の家を再興するという兄彌太郎のはからいで木村しまと結婚し、慶応3年(1867年)、児玉郡新宿村寄島(現在の神川町新宿)の新家(慶応3年建築)に移り、木村九蔵と改名した。九蔵は、新宿村木村家の隣村、児玉郡渡良瀬村出身で横浜に出て貿易等で成功を修めていた原善三郎などとも交流をもっていたが、商業や貿易へと志向性が揺らぐことはなく、横浜でも養蚕家との知遇を得ると養蚕についての意見を訊ねるなど、養蚕改良への情熱が強かったことが知られている。



競進社社長木村九蔵

九蔵は、自ら養蚕改良を積み重ねるとともに和漢の蚕書を読み、奥信上武の蚕糸家等の篤農家を訪ね、自らの経験を踏まえ各方面からの教えを乞いながら、漸く近代的な養蚕飼育法の見通しを得ることができた。明治5年(1872年)、九蔵は新しい養蚕飼育法として「一派温暖育」を発表し、その後も信毛地域に養蚕家、製糸家を訪ね養蚕と蚕種等についての知識と技術の吸収に努

め、その方法に学びながら養蚕改良を続けた。明治10年(1877年)には、近在の養蚕を志す人々を糾合し、「養蚕改良競進組」結成した。

九蔵は、よい繭は製糸に適した繭でなくてはならないと考え、前橋の有名な製糸家を訪ね、譲り受けた良質な蚕種を改良して、「白玉新撰」と名づけた。明治17年(1884年)、競進組への入門者が増加したので、「競進組」から改め、養蚕改良と伝習の結社としての組織化を図り「競進社」とした。競進社は本社を自宅とし、児玉町に出張事務所と養蚕伝習所を創設し、自ら考案した



競進社模範蚕室

「一派温暖育」の改良を続けながら養蚕の伝習に努めた。この年、秩父事件にかかる「金屋戦争」と呼ばれる戦闘があったが、木村九蔵と秩父事件や自由民権運動との関係は知られていない。

明治18年(1885年)、東京上野公園で全国の繭絲織物陶漆器共進会が開催され、木村九蔵は養蚕改良と伝習に功績があったとして農商務省から功労賞を授与された。競進社は、三重県の養蚕伝習所に教師を派遣したのをはじめ、明治19年(1886年)以降、全国に支部を開設し、いよいよ競進社と木村九蔵の名声は全国に広まっていった。

明治22年(1889年)、パリ万国博覧会の官費視察に我が国から4人が派遣され、その中の一人に木村九蔵が選ばれた。九蔵らは、パリ万博に出品された人造絹糸をはじめフランスやイタリア等ヨーロッパの養蚕・製糸のあり方を視察し、自分の養蚕飼育法の方向性に自信を深めるとともに、西洋の技術に触れ、学問的に研究されていることに驚き、本邦の養蚕業に活用する見通しを得た。当時、地元でも名声を得ていた九蔵であったが、その頃日本では極めて稀であった「洋行」から帰国すると、更にその名声は高まり多くの人々の称賛を浴びることとなった。

木村九蔵は、西洋の先進の蚕種貯蔵所を視察していたが、我が国にも近代的な蚕種貯蔵が必要であることを痛感し、埼玉県令吉田清英の協力を得て、明治25年(1892年)本庄町(現在の市役所の西側に位置する富士機工跡地の場所)に日本初の近代的な蚕種貯蔵所を設け、蚕種貯蔵の先駆けとなった。その後、明治27年(1894年)には、木村九蔵の養蚕飼育法である「一派温暖育」の理念と方法を実現した蚕室を競進社児玉伝習所内に建設した。この蚕室は、後に「模範蚕室」と呼ばれるようになり、これが今日の埼玉県指定文化財(建造物)「競進社模範蚕室」である。また、養蚕も学問的に究め教育する必要があると考えた九蔵は、ドイツ製の顕微鏡等を購入し、明治30年(1897年)児玉伝習所内に競進社蚕業講究所を開設した。

九蔵は、病床にも蚕架を設け、病に冒されながらも養蚕改良を行おうとした姿勢は、直接に教育・伝習を受けた教え子たちに深い感銘を与えた。木村九蔵の生涯は、養蚕改良と教育・伝習に捧げ、近代的養蚕飼育法の普及によって日本の近代化に尽くし近代の礎となったと言っても過言ではないであろう。明治31年(1898年)1月29日病没。54歳であった。九蔵の死後、明治32年には二ノ宮の金鑽神社参道西側に九蔵の業績をたたえた巨大な頌徳碑が建てられた。この頌徳碑の石材は、本庄駅から二ノ宮の金鑽神社まで人力で三カ月余りをかけて運ばれたという逸話をもっており、九蔵の遺徳をこの地域に人々に広く再確認させるものとなった。

その後、競進社蚕業講究所は、明治32年実業学校令に基づく競進社蚕業学校となり、高山社では明治19年(1886年)に高山長五郎が没したが、競進社と同様な動きをとった。なお、高山社蚕業学校が養蚕業の衰退に伴って閉校したのに対し、競進社蚕業学校は地域の農業を支える実業学校に転身し、大正14年(1925年)競進社実業学校として農業をはじめとする地域の実業を支える教育機関となり、昭和12年(1937年)には児玉農学校に、昭和23年(1948年)には新制の児玉農業高等学校へと推移した。昭和47年(1972年)には埼玉県立に移管して埼玉県立児玉農工高等学校となり、平成7年(1995年)校名変更によって埼玉県立児玉白楊高等学校として今日に至っている。木村九蔵は、児玉白楊高校の「校祖」とされており、今日では同窓会を中心に顕彰事業が行われている。

○一派温暖育と競進社模範蚕室 ー競進社模範蚕室の成立ー

木村九蔵は、自らが考案した「一派温暖育」という養蚕飼育法を実現するのに適した蚕室を長い間構想しており、その理念と技術を実現する建物として競進社に新しい蚕室を建設した。この蚕室は、養蚕飼育法の伝習に伴う蚕室の模範的な建物として捉えられたので、後に「模範蚕室」と呼ばれるようになり今日に至っている。この「模範蚕室」の特徴は、「一派温暖育」に適した構造と形式を有しているという点にあり、木村九蔵の近代的養蚕法の理念と技術を今日に伝える貴重な建造物として、昭和47年(1972年)に埼玉県指定文化財の建造物に指定されている。この競進社模範蚕室は、日本の近代を支えた養蚕業の貴重な伝習施設であり、明治期の養蚕改良と伝習の息吹を今日に伝える貴重な建造物であると言ってよいであろう。

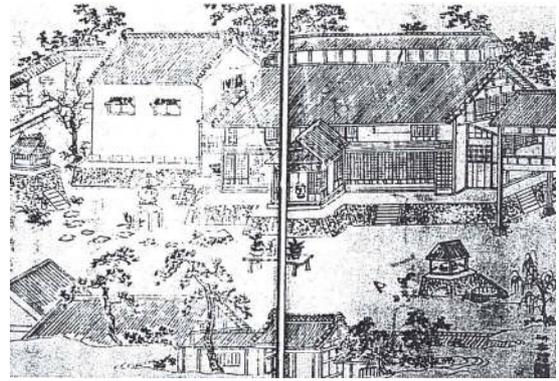


図-2 田島家の養蚕住宅
(明治5年「養蚕新論」)

「一派温暖育」という養蚕飼育法は、蚕室の換気・乾燥や温度を自然条件に委ねるのではなく、蚕の生育に適した温度や湿度等の環境を人為的・人工的に調整して養蚕を行う方法である。火熱を利用して外気との循環によって乾燥を図り、また暖房することによって蚕の食欲を増進し生育期間を短縮するという方式を、人為的に生育環境の調整の容易な小さな養蚕室に区切り、あるいはこれを接続することによって蚕の生育に適した人工的な環境を作り出し、安定した養蚕を達成するものであった。言い換えると、木村九蔵の養蚕飼育法は、蚕室の構造と一体のものとして捉えられていたと考えてよいであろう。



床下の煉瓦積み炉

当時の養蚕飼育法には、「温暖育」と「清涼育」がすでに知られていた。たとえば、「温暖育」は、寒冷な東北方面とくに福島県北部の信達地域で発達した方法であり、冷気を避け暖房によって蚕の食欲を増進し生育期間を短縮するという方法であった。この「温暖育」は、近世養蚕飼育法としての一定の完成を見ていたものである。また、伊勢崎市島村の蚕種生産者として著名な田島弥平の「清涼育」は、大きな養蚕室に自然の涼風を招き入れ乾燥を図る方法であり、そのために屋根棟部に長大な換気用の越屋根を設置し、天然育の利点を最大限に活用とした方法として近世の養蚕飼育法の一つの到達点であった。近代の養蚕飼育法は、このような「温暖育」と「清涼育」の利点を合わせた「折衷育」とされるものが主流であるが、木村九蔵の「一派温暖育」は、単にこのような「清涼育」と「温暖育」を折衷したものではなく、人工的に蚕の生育環境を整えることに重点があったことに注目しておく必要がある。



競進社模範蚕室の廊下



室内から見た炉の様子

模範蚕室は、瓦葺き切妻造りの外観をもち、養蚕室を小さく区切り、各室に三基の炉と床下の換気窓および屋上に「高窓」



広々と設置された欄間

と呼ばれる排気・換気用の越屋根を設置し、中二階の床は、小間返(コマガエシ)と呼ばれる簀子天井として養蚕室の換気に配慮した構造となっている。模範蚕室は、このような養蚕室を四室連接した構造をもっており、



競進社模範蚕室の内部(蚕棚の状況)



小間返し天井

また、欄間～腰欄間からの採光や換気、四周に廊下を設け、雨戸は気象条件によって開閉を行うなど過剰な外気の遮断と作業上の効率を図っている。この養蚕室の三基の炉には炭火を用い、室内の空気の流通と湿気の排除に重点が置かれているところが、飼育室内を温暖に保つことを方法の中核におく従来の「温暖育」とは異なった、木村九蔵の養蚕飼育法である「一派温暖育」の特徴があったと考えることができる。なお、競進社模範蚕室は、養蚕室と中二階の階上を合わせて上蔭に至る養蚕の全過程が完結するような面積で設計されている。

この「競進社模範蚕室」は、瓦葺き切妻造りの高窓を載せた養蚕家屋のひとつの標準となった。競進社流の蚕室や養蚕家屋の特徴は、高窓の設置ばかりでなく、小さく区切った養蚕室に炉および床下の換気窓をもち、二階にコマガエシの床をもつなど、「一派温暖育」に適合した構造をもっているが、それぞれ個別の蚕室や養蚕家屋は、厳密に同一の構造をもっている訳ではなく、養蚕飼育法に適う多様な形態の家屋が残されているが、これらは急速に減少の一途を辿っており、具体的な調査と記録が望まれるところである。



高山社と高山社立甲種蚕業学校

○競進社と高山社

木村九蔵と高山社を興した高山長五郎は実の兄弟であり、藤岡市の旧「高山家」は、高山長五郎とともに木村九蔵が生を受けたと考えられる場所である。ユネスコの世界遺産登録を目指している「富岡製糸場と絹産業遺産群」の一角をなす「高山社発祥の地」については、平成21年(2009年)に「高山社跡」として国の史跡に指定された。現在の建物【写真】は、明治8年(1875年)に高山長五郎によって建てられた蚕室をもとにしているものと推定され、養蚕家屋の歴史を捉える上でも重要な建物である。



高山社があった高山家

「高山社」と「競進社」の関係については、木村九蔵の「一派温暖育」と高山長五郎の

「清温育」の形成過程から辿ることができる。群馬県では、高山長五郎の「清温育」については、その文言が資料や記録に登場しないことをもって、明治16年(1883年)以降に形成されたとする考

案がある。しかし、木村九蔵の「一派温暖育」は、明治5年(1872年)に発表され、翌年には埼玉県内の蚕業講談会でこの養蚕法の講演を行ったとされている。「一派温暖育」をはじめとする木村九蔵の養蚕飼育の方法を述べた『蚕飼の鑑』の下編「先生の講話」では、木村九蔵の講話を筆記し本人の校閲を受けて明治27年『春蚕飼育日表』として刊行されたものである。しかし、この『蚕飼の鑑』下編の記述においても「一派温暖育」という名称は用いられておらず、“木村九蔵の養蚕飼育法”という形で取り扱われていることは注目しておくべき点である。

この点に注目するならば、近代の養蚕飼育法の成立時期について捉える上では、「清涼育」や「一派温暖育」等の名称の記載の有無をもってその形成を語ることは適切ではないであろう。当時の養蚕飼育法の名称は、『蚕飼の鑑』等の蚕書の記述から考えるならば、木村九蔵らの養蚕飼育法として認知されていたものと考えべきである。同時代においては何よりも個別の飼育法の名称より直接指導者から伝習を受けた方法であるという実学的な捉え方が広がっていたのであろう。木村九蔵の「一派温暖育」は少年時代の養蚕が原点であり、何故父の隠居所でよい繭がとれ、兄とともに丹精をこめて育てた実家での養蚕ではよい繭が取れなかったのかという、それぞれの違いについて、その条件を一つ一つ実際に検証し、この経験を基礎に蚕の生育条件に適った飼育法に到達したものであった。

競進社模範蚕室は、国指定史跡「高山社跡」に勝るとも劣らない貴重な文化財であると言ってよい。むしろ、「絹産業遺産群」のリストの中の各遺産と比較しても決して見劣りのするものではなく、まさに日本の近代養蚕教育の遺構として全国でも稀に見る貴重な建造物である。ともあれ、高山家蚕室や高山分家蚕室と、「一派温暖育」を実現するために建設された競進社模範蚕室の類似点は数多く見出すことができる。これは『蚕飼の鑑』等に記述された蚕室と養蚕飼育法との相関によって説明できるであろう。これらの建造物の構造には新しい養蚕飼育法が実現されており、その存在から少なくとも高山家蚕室が建設された明治8年(1875年)には、後の「清温育」に近い養蚕飼育法が確立していたものと見なすべきである。言い換えれば、「清温育」と言う文言が資料や記録に登場しないことをもって、これが明治16年(1883年)以降に形成されたという考案は斥けなければならない。

なお、養蚕家屋の高窓の起源をすべて文久元年(1861年)建築の島村(現伊勢崎市)の田島弥平の豪壮な蚕室に求め、この蚕室から多様な形態の高窓が形成されたという考案もあるが、そもそも「高窓」と呼ばれる越屋根は、養蚕の盛行によって設置される家屋が増加したとはいえ、本来は換気・排煙のための装置であり、「温暖育」や「清涼育」が発達する以前から認められる施設である。偶然残された断片的な記録を一般化するのではなく、養蚕飼育法の多様化に伴って高窓もまた多様な変化発達を見せたと考えてよいであろう。

近代的な養蚕飼育法の考案とその伝習に尽力された木村九蔵の生涯については、中村高樹の『蠶飼の鑑』上編(中村編1900)に詳しい。中村高樹は津和野出身であり木村九蔵に師事し、木村九蔵の講演を筆記し木村自身の校訂を経て出版され、木村九蔵の養蚕飼育法を今日に伝えるものとなっている。なお、中村のブロンズの胸像が児玉白楊高校の記念館前に設置されており、往時の姿を垣間見ることができる。また、木村九蔵の生涯や業績あるいは競進社の歩み等については、逸見茂治による『校祖木村九蔵先生伝』(逸見1957)や、『児玉農工高校80周年記念誌』(1980)等に比較的詳細な記載があり大いに参考になるものである。



中村高樹

3. 養蚕業の隆盛

○養蚕業

既に述べてきたとおり江戸時代の養蚕の状況を記す史料に乏しいため、当時の養蚕について知りにくいのが現状である。しかしながら残された史料の中に養蚕を行っていたことを示す記述があり、特に日記史料の中に蚕や桑の問題を記録したものがあつた。そのことから江戸時代中期には市域各地で養蚕が行われており、上仁手の茂木家の様に代々蚕種製造を行う者も出現している。幕末期の安政6年(1859年)に横浜が開港されて以後、生糸・蚕種が重要な輸出品となると横浜に比較的近い埼玉県は養蚕業が年々盛んになっていった。国及び各県は蚕業の奨励策をとり、養蚕を行う農家が急激に増加した。養蚕が盛んになるとより高い収繭高をめざして先進地域に学ぶ者が増加した。特に埼玉県では競進社、群馬県では高山社といった養蚕改良普及結社・養蚕伝習所があつて、全国各地から多くの若者が集まっている。児玉郡では明治10



木村豊太郎伝習所全景(神川町新宿)



競進社浅見分教場(蚕玉館)全景(本庄市児玉町児玉)

年(1877年)に養蚕改良競進組が結成され、同17年(1884年)に競進社と組織を拡大させたが、競進社とは単に一地域の一つの結社ではない。本社は新宿村(現神川町)の木村九蔵家で、付近には木村豊太郎や浦部良太郎といった競進社の幹部達の伝習所が林立し、児玉町に直営の競進社伝習所があり、その東側には競進社の分教場でもあり個人経営でもあつた浅見氏の蚕玉館があつた。このように児玉郡内には多くの伝習所があり、それらが競進社を構成していたものと思われる。そのため多くの実習生を受け入れることができたのである。児玉町の競進社伝習所は、蚕業講究所となり単なる伝習所ではなく蚕業教育の教育機関へと発展していった。

このように本市域は北部は蚕種業が盛んになった大型の養蚕農家が多く育ち、南西部地域は一大養蚕地帯であり、そこに競進社のような伝習施設が生まれ育っていった。

明治末年になると比企郡菅谷村(現嵐山町)付近で条桑育という飼育法が行われるようになった。条桑育とは従来の清涼育・温暖育・折衷育といった飼育法とは異なって、蚕に桑の葉が枝についたまま与える方法で、これにより手間が相当量省略することができたため、各地に広まった飼育法である。有る程度成長した蚕に行う方法であるが、それまでは枝から葉のみを摘み取っていたため、かなり手間がかかっていた。しかしながらこの方法は当時は粗放的な方法として繭質を落とすとして製糸家から嫌われ、反対が多い飼育法であつた。大正期になって農村部から都市部への人口の流出が増加すると養蚕農家にとってこの飼育法は労力節約型の飼育法として受け入れられていった。さらに条桑育は繭質低下につながらないという研究データも出されて、条桑育の改良によって大正末期には養蚕家の3割が実施したという。これ以後、昭和期には条桑育の普及や養蚕具の改良などより一層省力化の努力が続けられていくのである。昭和2年(1927年)に撮影された金屋村(現本庄市児玉町金屋)地内の養蚕農家の写真でも庭先に簡易な小屋を建てて飼育している様子が映し出されている。

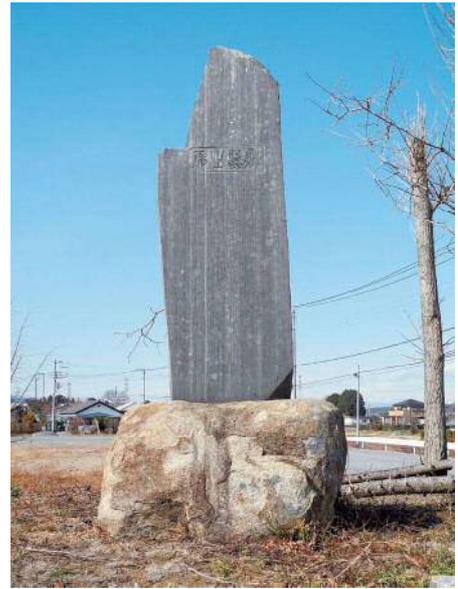
○秋蚕事件

本県の蚕種業が隆盛となった時に、さらなる新たな蚕種が生みだされた。明治5年(1872年)に富岡製糸場の工場長となった尾高惇忠は「秋蚕」を提案した。惇忠はこの新しい蚕種を「秋蚕」と名付け、翌年には政府にその奨励を請願している。惇忠は明治8年(1875年)には「秋蚕説」を発表し、信州だけでなく全国各地で取り入れることを提唱した。この秋蚕に賛同した現深谷市成塚や明戸の養蚕農家は実際にその飼育を試みている。しかしながら当時蚕種製造組合法が施行されていて、蚕種用の原紙の入手が出来ず、古紙を利用して15000枚もの蚕種の製造を行った。当時の埼玉県令白根多助はこの様な動きは条例に違反するためとして秋蚕を認めなかった。秋蚕製造者は県令に対して秋蚕種製造嘆願書を提出した。これを受理した県令白根は歎願者の主旨を理解の上に同情し、政府の内務卿大久保利通に特別許可を陳情した。この陳情は許可されなかったが、この陳情書には現在の深谷市・本庄市(本庄町・児玉町・瀧瀬村・牧西村・傍示堂村)の蚕種製造者が名を連ねていた。

この時の陳情者の秋蚕種製造枚数が7000枚を超えており、もともと蚕種製造条例違反の製造であったため、県令もこの取り扱いに苦慮したという。政府はこの陳情を条例違反として厳しい態度を示し、これが後に「秋蚕事件」と呼ばれる大事件に発展した。この問題は明治10年(1877年)7月に熊谷裁判所で審理にかけられ、翌月判決が出された。結果、県令白根も減俸処分となり、蚕種を製造した川田・江角・葦塚三氏が科料金を果たせられたが、国益をはかるといふ趣旨と情状酌量によって科料金が半額となり蚕種は没収と決まった。ところが翌11年に原紙規則と蚕種製造組合法が一括廃止となり、先の熊谷裁判所の判決が取り消され無実が確定したのである。これにより本県の養蚕関係者に衝撃を与えた「秋蚕事件」が終結し、以後、本格的に秋蚕の普及が始まるのである。

○県令白根多助と吉田清英

県令白根多助は文政2年(1819年)に長州藩士太田家に生まれ同藩の白根家の養子になった。明治4年(1871年)に埼玉県が設置されると権参事となり、同8年に県令となった。県令は後の県知事のことである。白根県令は名県令といわれ、特に民意を尊重することにつとめた県令であった。「秋蚕事件」の際にも陳情者の意を汲み、県内での秋蚕を許可し、何度も国へ歎願を行い許可のために奔走している。吉田清英は薩摩藩士で天保11年(1840年)の生まれ。明治9年(1876年)に埼玉県権参事となり、11年には大書記官となって白根県令を補佐した。15年に白根県令が没すると埼玉県令に任命された。19年に官制の改革で知事となり初代埼玉県知事となった。吉田県知事は特に勸業政策に意を用い、蚕糸業の振興に全力を尽くしている。蚕種組合の設立など本県の蚕糸業の発展に大きな貢献を果たした。明治22年(1889年)に職を離れてからは本庄町に居を移し、明治24年(1891年)には競進社長木村九蔵らと共に本庄町に蚕種貯蔵株式会社を設立した。



秋蚕の碑(美里町木部)



日本蚕種貯蔵株式会社貯蔵庫

4. 蚕種業の隆盛

蚕種とは蚕の卵をいい、蚕蛾が紙(蚕種原紙)の上に産卵されたものを蚕種紙または蚕卵紙などといった。江戸時代中期頃より蚕種を専門に製造する業者が現れ、農家はこの業者より蚕種を買い求めて養蚕を行った。養蚕の隆盛はそのまま蚕種業の隆盛につながるが、幕末期から明治初期にかけて全国的に蚕種業が盛んとなったのは一つにヨーロッパにおける微粒子病の流行があったことによる。これによりヨーロッパ産の蚕種が使えなくなったことで、病気にかかっていない日本や中国産の蚕種が大量に輸出されることとなった。需要の増大は高価格で販売できることとなり、国内の蚕種業がにわかに注目され、横浜から輸出される蚕種は生糸に次ぐ重要な輸出品となった。埼玉県では利根川沿岸の村々が一大生産地となった。表②でもわかるように妻沼地域(熊谷市)・深谷市北部(深谷・岡部地域)・本庄市北部・上里町がその中心であった。また山間の秩父郡内や本庄市南西部も生産地であった。蚕卵紙のもととなる蚕種原紙の生産地が小川町・東秩父村を中心とした比企郡内で、この和紙の生産地が原紙を多く生産していたことも、比較的地理的に近い当地域が原紙の入手に便利だったことも蚕種生産に適した一つの要因だったものと思われる。

○江戸時代の蚕種製造

本庄市内では江戸時代に蚕種製造農家は生まれたが、特に利根川沿岸部の宮戸・小和瀬・仁手・上仁手・下仁手地区等に多くあった。明治40年(1907年)の「蚕糸業調査報告書」(埼玉県行政文書)によれば、市内上仁手村の茂木家は代々蚕種の製造販売を行ってきたといい、江戸時代の文政7年(1824年)8月の相州蚕種帳によれば蚕卵紙500枚以上を売り捌き、嘉永年間には相州及び甲州方面へ蚕種を販売した販売帳があるという。市内牧西地区では、残された史料(小川家文書)によれば、明治3年(1870年)の段階で8人の者が製造に当たっていた。製造能力は2人が350枚、6人が300枚であった。合計すると2500枚である。しかしながら実際の生産数は変動があり、牧西村の「物産書上」を見ると、明治8年～10年の記録が残されており、蚕卵紙の枚数は、1904枚・1450枚・2693枚となっている。

明治10年(1877年)の段階における蚕種の生産量を「武蔵国郡村誌」から物産項目から蚕卵紙の生産量の多い順に拾い出すと表②のようになる。

現在の本庄市域に属した町村数50の之内、物産として蚕卵紙を載せている村数は26で、総生産数は81439枚である。表②にあるように利根川沿岸地域の村々に生産数の多い村が目立ち、特に深谷市から上里町にかけて顕著である。

旧村名	現在	蚕卵紙
児玉町	本庄市児玉町児玉	17513枚
上仁手村	本庄市上仁手	12000枚
下仁手村	本庄市下仁手	8962枚
宮戸村	本庄市宮戸	6124枚
小和瀬村	本庄市小和瀬	4800枚
仁手村	本庄市仁手	3988枚
本庄駅	本庄市本庄	3748枚
八幡山町	本庄市児玉町八幡山	3500枚
新井村	本庄市新井	3076枚
山王堂村	本庄市山王堂	2800枚
久々宇村	本庄市久々宇	2551枚
牧西村	本庄市牧西	2500枚
金屋村	本庄市児玉町金屋	2000枚
秋山村	本庄市児玉町秋山	1649枚
勅使河原村	上里町勅使河原	5600枚
八町河原村	上里町八町河原	2950枚
黛村	上里町黛	2137枚
忍保村	上里町忍保	2000枚
高島村	深谷市高島	16000枚
新戒村	深谷市新戒	10836枚
中瀬村	深谷市中瀬	10568枚
横瀬村	深谷市横瀬	10119枚
成塚村	深谷市成塚	8000枚
血洗島	深谷市血洗島	4251枚
深谷駅	深谷市深谷	3473枚
下手計村	深谷市手計村	3174枚
矢島村	深谷市矢島村	1200枚
石原村	熊谷市石原	4570枚
大宮郷	秩父市秩父	10000枚

表② 町村別の蚕種製造枚数
(明治10年「武蔵国郡村誌」による)

考えて、桑樹改良・蚕の飼育法研究にもいそしんでいた。さらに幕末期には蚕種需要が増大すると蚕種の製造を本格化し、茂木家は「奨業舎」と称して蚕種製造を行った。明治6年(1873年)に蚕種取締法が施行されると、小平は熊谷県蚕種副取締役を命じられた。さらに利根川上組合蚕種製造組合を組織して自ら組合長に就任している。その後、明治11年(1878年)には仁手会社を設立して社長になり、さらに同34年(1901年)には児玉郡蚕種同業組合の会長となり、同42年(1909年)には埼玉県蚕種同業組合連合会会長を務めるなど、蚕種製造・改良・販売など埼玉県の蚕種業に多大の貢献を果たした。現在、本庄市千代田の金鑽神社北側に小平の頌徳碑が立っている。

5. 盛んなりし頃の養蚕地帯

○高窓の里

本庄市児玉町小平地区の東小平地区は「高窓の里」と呼ばれている。「高窓」とは農家の主屋や蚕室の屋根に換気用の小さな屋根を乗せたものをこの地方では高窓と呼んでいる。建築用語では「越屋根」であり、群馬県中央部から南部にかけては「ヤグラ」といい、同じく西部地域では「テンソウ」と呼ばれている。ほかにもキヌキ・ケムダシ・ウダツなどと呼ぶ地域もある。この地域には古く



高窓の里(本庄市児玉町小平)

より高窓を乗せた養蚕民家が多く残されていることから高窓の里と呼ばれている。本庄市内にはかつてこの様な高窓を乗せた養蚕民家は多数存在したが、養蚕の衰退、農業の衰退、農家の核家族化など、いくつかの理由により近年急激にその数を減らしている。かつては高窓を乗せた家を見れば蚕をやっていた家で間違いなかったが、そういった風景も近年は次第に失われつつある。

高窓を乗せた養蚕民家を近年は「近代養蚕住宅」とか「近代養蚕民家」などと呼ぶようになってきた。主に明治期以降に養蚕のために建てられた住宅をそう呼んでいる。必ずしも高窓を乗せていない家も多く含まれるが、一般的に切妻造り瓦屋根(或いは鉄板屋根)で総二階建ての大型の養蚕住宅を指している。かつては市内の各地区で多くを見ることができたが、現在ではその数が減少しており、高窓の里の東小平地区以外では、宮戸・沼和田・稲沢・太駄・北堀・上仁手地区などで今でも見ることができる。

○養蚕の風景

昭和2年(1927年)に長瀨町のある養蚕教師が、写真師を連れて児玉郡金屋村から秋平村方面の養蚕農家に養蚕指導で訪れた記録写真が残されている。何枚か取り上げてここで紹介しよう。

市内児玉町金屋地区の養蚕農家と推定される。庭に臨時の小屋を作り、小屋の中でも蚕を飼っている。

撮影された昭和2年頃には条桑育という飼育法が広く普及した頃である。それまでは群馬県伊勢崎市の島村の田島弥平が考案した清涼育や、競進



小屋の中での飼育風景

社木村九蔵の考案した一派温暖育が北武蔵から上州にかけて広く普及していたが、この時代には条桑育という新しい飼育法が広く普及した。

清涼育や一派温暖育は換気や気温・湿度にきめ細かく配慮した飼育法であったが、条桑育は、ある程度育った蚕には枝のままの桑を与えたり、屋外で解放した小屋の中で大量に飼育する方法であった。多少のロスは考えなくても大量飼育に適した方法で、手間も省けて広く普及した。写真でも屋外での簡素な小屋で飼育しているのがよくわかる。母屋室内も一階・二階とも窓を開放して飼育している。

下の写真は撮影地不明ながら金屋付近と思われるもので、同様に庭に大きな小屋を建てて飼育面積を拡大している。

条桑育は明治末年頃から普及し始め、全国へと広まっていったが、欠点も多く、大正2年の大阪朝日新聞の記事では、「飼育却て困難」とか「条桑育の欠点」などの見出しで、飼育法の良否について報じられた。また製糸家からも反対が強かったという。条桑育は手数が大幅に減らせる利点があったが、当時は安楽育とか放任育とか呼ばれ、繭の品質低下などが叫ばれていた。しかしながらその利点が受け入れられ、品質も維持できるとされ次第に普及していった。

○特徴のある養蚕民家



入母屋造りの民家 (写真①)



赤城型民家 (写真②)



総二階造りの民家 (写真③)



高窓を乗せた茅葺民家 (写真④)

農家では蚕を大量に飼うために主屋を改造している。江戸時代初期の関東平野の農村の民家は、養蚕を大規模に行う以前の姿は、屋根は寄棟か入母屋造りで平屋であり、屋根は南側の軒が深く下がり、北側は北風を防ぐため地面に近くまで葺き下ろしていた。養蚕の普及に伴い小屋裏で蚕を飼うため、明かりとりと換気のため南側の屋根の一部を切り上げたり突き上げ(赤城型や榛名型民家)たり、あるいは南側の全面を切り上げ(平かぶと)たり、妻側を切りあげ(妻かぶと)たりして、小屋裏の利用が進んだ。中には前面と左右の妻側まで屋根を切り上げ、天井に床を張って中二階あるいは二階形式とした民家も現れている。これらは養蚕の影響が大きかったものと思わ

れる。次に4枚の茅葺民家の写真を載せたが、いずれも本庄市内の民家で、写真は昭和40年代の撮影と推定される。写真①の民家は平屋入母屋造りで前面の下屋も茅葺で、古いタイプの形式といわれる。屋根は左右裏側とも深く葺き下げられている。この家ではあまり養蚕のための改造は見られなく古いタイプの様相を残している。写真②の民家は寄棟造りの民家で、屋根の南側を切り上げて二階部分の採光をはかったもので、いわゆる赤城型民家である。前面の下屋は瓦葺となっている。写真③の民家は入母屋造り民家で、前面・側面とも屋根を切り上げ二階の利用範囲を大幅に拡大し、総二階造りとなっている。いわゆる平かぶと造りと呼ばれる民家である。養蚕のための改造が進んだ結果である。写真④の民家は、囲炉裏やカマドの煙は入母屋の家では妻部分から排出するが、屋根のほぼ中央部分(囲炉裏の真上)に小規模な煙出しを設けた家が出現したが、幕末頃には大規模な高窓(越屋根)が登場してくる。この家でも屋根の中央に大規模な高窓を設置している。写真によれば高窓付近の茅葺の様子から、建築当初より設置したものではなく後の改造で設置したものと思われる。これも養蚕の普及に関わるもので、特に島村の田島弥平の推奨した清涼育の影響が大きいと思われる。特に田島弥平は、空気の流通にこだわり、屋根に長大な高窓(総ヤグラ)を乗せる事を推奨し、自分の主屋や蚕室にも取り入れている。明治期も中程になると群馬県では高山社、埼玉県では競進社の養蚕改良普及結社が生まれ、それぞれの飼育法に適した蚕室の改造や新築を推薦し、特に競進社は蚕室の部屋ごとに高窓を設ける方法を推奨している。その為、それまで主流であった長大な高窓(総ヤグラ)から長さの短い高窓を家の規模に応じて2基から3基乗せる養蚕住宅が増加している。田島弥平の考案した清涼育の影響を受けた養蚕住宅が、利根川の両岸に極めて多く分布しているのに対して、清涼育・一派温暖育の影響を受けた養蚕住宅は群馬県西部から埼玉県北西部の丘陵地帯を中心に広く分布している。

○農村の風景

養蚕の普及は農村の風景を一変させた。本庄市内では養蚕農家が増大し、茅葺民家も少なからず改造されていった。明治後半までには専用の養蚕住宅を建築する農家も増えていき、市域の各所で高窓を載せた大型の養蚕住宅が見られるようになった。町場でも町屋の二階で養蚕を行う家もあり、高窓を載せた家もあった。しかしながら養蚕が隆盛期にあった時期とはいえ、全ての農家が住宅を新築や大改造したわけではなく、農家の経済力や養蚕規模、さらに



昭和2年の児玉町秋山風洞地区

養蚕の取り組み姿勢により異なっていった。利根川の沿岸部の宮戸・小和瀬・沼和田・杉山地区、山間部の太駄・稲沢・小平地区では大型の養蚕住宅が多くみられ、この地域では蚕種業が盛んであったため大型の養蚕住宅が多く建てられたものと思われる。養蚕はその周辺部でも広く行われ、金屋・宮内・秋山・吉田林・上真下・牧西・東富田・北堀・鶴森・瀧瀬などでは改造された茅葺及び板葺住宅の中に明治期以降に新築された養蚕住宅が散見するという状態であった。

上の写真は昭和2年の撮影で、市内児玉町秋山の風洞地区の風景で、写真両端に高窓を乗せた瓦葺の民家が見えるが、それ以外の多くが茅葺民家で、高窓も大きめのものを乗せていて養蚕の影響が窺えるものである。

○近代養蚕住宅の増加

養蚕の隆盛は、農家の住宅に大きな変化をもたらした。茅葺の住宅は冬季の北風から逃れるために北側を地面近くまで屋根をふき下していた。しかしながら飼育面積の増大のため二階部分を利用するため、屋根を切り上げて二階部分の採光や換気のために改造が行われた。養蚕は比較的短期間に現金収入が見込めるため、より本格的な養蚕住宅を新築する例も見られた。さらに敷地内に専用の蚕室も建築する例も増加した。近年、主に明治期以降に建築が始められ、昭和30年代頃迄造られた養蚕住宅をさして近代養蚕住宅などと呼ばれるようになってきた。この新住宅は島村の田島弥平の唱えた清涼育や、児玉の競進社、或いは藤岡の高山社の唱えた一派温暖育や清温育などの飼育法に適した構造を取り入れた養蚕住宅である。外見上、切妻造り棧瓦葺三階建てが多く、屋根に高窓を乗せ、一見して養蚕住宅とわかる。

以下、市内に残る近代養蚕住宅について数例を紹介する。

写真⑤は児玉町小平(東小平)にある根岸家主屋で、切妻棧瓦葺三階建ての主屋である。養蚕住宅の場合、二階の上部の小屋裏にすのこの天井を張って三階構造とした例は市内でも数例見られるが、二階に比較してやや狭いながらも独立した三階を設けるのは市内では珍しく数例にとどまる。その上に小ぶりの高窓2基を乗せる。同家には主屋の西側に長い高窓を乗せた専用蚕室も持っている。同家では蚕種の製造は行っていないといい、大規模養蚕農家といえる。

写真⑥は、旧鵜森地区の早野家主屋で、数度の改造を経たとはいえ桁行10間余りの大型住宅である。高窓3基を乗せる。せがい造りの構造を持ち、二階の外廊下や主屋根を出桁で支える造りとなっている。小屋組み部分にすのこの床を張り、内部三階構造となっている。なおこの早野家主屋は平成22年に建て替えられた。

次の例は蚕種製造にかかわった大規模な養蚕農家の例である。写真⑦は宮戸地区の金井家で、宮戸地区は地区の北側が上州の島村で、一大蚕種製造地帯であった。隣接する宮戸地



三階建ての養蚕民家(本庄市児玉町小平)(写真⑤)



せがい造りの養蚕民家(写真⑥)



五畝館(写真⑦)

区にも同様に蚕種製造者はおおくいた。金井家は江戸時代宮戸村の名主役を務めた旧家で天正19年の宮戸村検地帳ほかを所蔵している。同家は江戸時代の養蚕状況については不明であるが、明治に入ってから「五畝館」と称して蚕種の製造販売を手掛けている。同家の主屋は大規模なもので高窓3基を乗せた近代養蚕住宅であった。現在は瓦の葺き替えを行い高窓は撤去したが、建物自体はそのまま残っている。写真は高窓撤去前のもの。主屋の西側に接するように蚕室を持ち蚕種の製造を行った。同家には五畝館時代の写真や、明治時代に発行された埼玉県発行の産業振興冊子などに広告が乗せられている。なお、五畝館当時の写真を口絵に収録している。

以上のように、近代養蚕住宅と呼ばれる民家を数例紹介したが、かつては本庄市内で200軒近くの高窓を乗せた養蚕住宅や専用蚕室が存在したが、近年は養蚕業の衰退、核家族化、住宅の老朽化などの幾つかの理由で急激にその数を減らしており、現在は100軒近くまで減少してしまった。

6. 繭市場の発展

江戸時代に市内三か所(本庄宿・八幡山町・児玉村)に市場が開かれ賑わっていたことは既に述べた。本庄宿が2・7、八幡山町が5・10、児玉村が3・8の付く日という具合に、この地域では月に18日市が開かれており、取扱商品の繭・絹・太織り・生糸・真綿などが大量に取引された。本庄宿では同業者組織の繭仲間が結成されたようである。嘉永7年(1854年)の「本庄宿繭仲間一統渡世向議定書」が作られ、70人の商人が名を連ねている。その賑わいは明治期以降も続き、中でも繭の取引については大正2年刊行の『埼玉県産業案内』には埼玉県内の繭の集散地として次のように書かれている。



繭の出荷で賑わう本庄の繭市場

「児玉郡本庄町は、本県唯一の繭の集散地たるのみならず、全国中右に出ずるもの殆むどなかるべし、実に毎年取引価額約百五十万円の巨額に達す、其他北埼玉郡羽生町、加須町、大里郡熊谷町、深谷町、寄居町、北足立郡鴻巣町、桶川町、比企郡松山町、小川町、入間郡川越町、入間川町、豊岡町、飯能町、児玉郡児玉町等も亦盛んなる集散地にして、此等各地の総取引価額一千万円に達す」とある。

このように本庄宿や八幡山・児玉町付近に古くから市場が立ち、絹の取引や繭の集散地として栄えてきたが、本格的にその取引量が増大するのは、幕末期に日本が開国し、日本の重要な輸出品として生糸や蚕種が必要とされてからである。そのため幕末期から養蚕に適した村々ではより一層繭の増産に努め、蚕の飼育法の研究も各地でより盛んになっていった。明治期以降、養蚕の隆盛に伴って繭の取引量は増大した。

明治期に本庄町で発行された雑誌『八州』の第30号(明治30年)には繭の集荷場として賑わった様子が次のように記されている。

「製糸会社に於ては、武蔵繭を買入れざる者を冷評して素人製糸家と云ふ程にして、武蔵繭が同社会に好位置を占むること実に非常なりと云ふ。而して彼等が一概に武蔵繭と総称するものは其の実児玉郡の産出に係るものにして、児玉郡は全国第一の生繭生産地と云ふも過言ならず。同郡の繭は皆な本庄に集合来るが為に従って本庄町夏時の繁盛は一方ならず、毎年本庄に於て売買するもの二百余万円の多額に達し、殊に昨二十九年の如きは六七の二ヶ月間に於て百五十万円余の生繭売買ありたりと云ふ。」と書かれており、当時の児玉郡産出繭の評判や取引状況がよくわ

かる。

当時の本庄町や児玉町には繭取り扱う問屋や仲買商人が多くあった。特に本庄町にあっては、町田商店・柳沢商店・古川商店・金井商店・坂上商店・飯田商店・諸井商店・白石商店等有力な生繭商人が多数活躍していた。明治29年の段階ではこれらの生繭商人は器械製糸の盛んな信州を中心とした製糸家達に繭の販売を行ったが、その製糸家の数は63社にも及んでいる。

明治35年(1902年)に発行された『埼玉縣営業便覧』によれば、本庄町には105軒もの糸繭商があった。江戸時代より繭の集荷場として賑わった児玉町では糸繭商は11軒であり、その数からも本庄町が繭市場として賑わったかがわかる数字である。

この様に本庄町が繭の一大集散地として発展したのは、地の利があったわけであるが、特に明治以降に急激に取引量を増大したきっかけの一つに明治5年(1872年)の官営富岡製糸場の開設があった。その後、製糸所長となった尾高惇忠は原料繭の仕入れのため本庄町に出張し、本庄町の町田氏・坂上卯之助・諸井泉右衛門らとはかり、開善寺を借り受けて生繭の買付所としたことが本格的な繭市場の始まりであったという。

○本庄商業銀行と煉瓦倉庫

明治16年(1883年)にわが国初の私鉄として設立された日本鉄道株式会社により上野・熊谷間の鉄道(現在のJR高崎線)が開通した。その建設は私鉄とはいいいながらも当時の政府より多大な支援の上に建設されたものであり、極めて重要な路線と認識されていた。完成直後に起きた秩父事件の際にも鎮台兵の移送などにも使われた。亦当然ながら当時の重要輸出品であった生糸の輸送に大きな役割を果たし、群馬・埼玉産の生糸を横浜まで運ぶ重大な使命がそこにあった。その為埼玉県内では鉄道沿線の本庄・深谷・熊谷・大宮町には多くの製糸場が進出しているのである。

高崎線の開通・本庄駅の開業は鉄道輸送による大量の物資を安全かつ迅速に輸送することが可能となり、本庄町には多くの製糸場が進出することとなった。本庄町は繭の一大集荷場として繁栄し、製糸工場の進出は多額の資金が流通することとなった。それは春蚕・夏蚕というように繭が出荷される時期が決まっていて、短期間に大量の繭が流通するため、多額の繭の購入資金が短期間に必要とされたからである。そのため金融機関の整備もまた極めて重要な案件であった。

明治27年(1894年)に本庄町に株式会社本庄商業銀行が設立された。これは本庄で最初の銀行といわれ、児玉町にも支店が置かれた。本庄商業銀行は当時盛んだった繭取引のための融資等に大きな役割を果たしたが、そのために創立間もない明治29年に銀行社屋に隣接して大型の煉瓦倉庫が建築された。この倉庫は融資の際に抵当とされた大量の繭を収納するための倉庫といわれ、当時盛んに導入された煉瓦造りの倉庫である。煉瓦造二階建て寄棟造りで、小屋組は木造トラス構造である。規模は桁行き約31m、梁間約8.5mの規模を誇る。煉瓦積みの壁の厚さは40cmある。煉瓦はイギリス積みである。二階は中央に柱を設けない広い一室で、荷物の積層に考慮して狭梁



旧本庄商業銀行煉瓦倉庫



旧本庄商業銀行煉瓦倉庫の内部、二階部分

形式のキングポストを用いている。壁には通風を考慮して窓を左右対称に配置され、また数も多い。さらに鉄の網戸と鉄扉を付けるなど、防火・換気・盗難に配慮した造りとなっている。現在この倉庫は国登録有形文化財になっており、当時の本庄町の繁栄を示す貴重な遺構である。

○横浜で活躍した生糸売掛商野沢正三郎

本市内で生産された蚕種や生糸は横浜に運ばれ海外へ輸出されたが、当然ながらそれを業とする者が多く現れた。その中で最も著名な人が隣町の渡瀬（現神川町渡瀬）出身の原善三郎である。善三郎は幕末期に横浜の開港に伴って進出した先駆け商人の一人で、亀屋を起こして大きな成功を収めた。同じ時期に市内児玉町八幡山からは野沢正三郎が同様に横浜に進出して野沢屋商店を起こした。正三郎は八幡山町の組頭を務めた野沢九兵衛家（屋号は陣屋口・陣屋入口）の分家で、江戸時代の末期に八幡山町の年寄役を務めていた。同町で商売を行いながら町の役職も務め多忙な毎日を送り、ある時は児玉郡元田村の鷹取山の開発を行ったり、児玉郡の重要な用水である九郷用水の取水口の竖岩くり抜きの事業も行っていた。また嘉永6年(1853年)に起きた八幡山町と隣町の児玉町との間で起きた市場争いの調停のため江戸に出て訴訟を担当する等活躍していた。



野沢正三郎の墓(本庄市児玉町玉蔵寺)

正三郎は安政5年(1858年)に横浜に出て弁天通に店を構えて生糸の商売を開始した。しかしながら活躍した時間は短く、わずか2年であった。文久元年(1861年)9月15日に病気のため47歳で亡くなってしまった。残された家族は相談の上店を閉めようとしたが、店には有能な店員が多くあり、上州高崎出身の店員であった茂木惣兵衛に店・暖簾など一式譲り渡している。野沢家では跡継ぎが幼少のため店の切り盛りは無理と判断したのであろう。後に野沢家を継いだ二代正三郎は児玉郡書記などになり活躍している。茂木惣兵衛は野沢屋を引き継ぎ、以降大きな発展をみせ、原善三郎の亀屋と並ぶ横浜を代表する大店に育て上げた。

野沢正三郎は郷里八幡山町の隣町の児玉町にある野沢家の菩提寺玉蔵寺に葬られている。墓前にある線香台には、屋号の「入九」と「横浜 茂木店職方中」と刻まれている。

なお野沢屋商店には正三郎生前には同郷の中里忠兵衛が勤めており、茂木惣兵衛が販売面を担当し、忠兵衛は舶来織物等の購入を担当して店の商勢を高めていたという。中里忠兵衛は児玉郡太駄村(現本庄市児玉町太駄)の出身で、正三郎没後、横浜本町三丁目に同名の野沢屋を開店して独立した。生糸売込商として活躍したが、取扱商品に生糸以外にも当時日本の代表的商品であった蚕種(蚕卵紙)の輸出にも重点を置いたようで、一時は大きな利益を得たと思われるが、後に蚕種の大暴落により大きな打撃を被った可能性がある。忠兵衛は晩年に藤岡町に戻ったともいわれているが、その理由の一つが蚕種販売の失敗にあったかもしれない。野沢屋惣兵衛は蚕種販売は小規模であったといい、逆にこの後生糸販売で大きな成功を収めていた。現在、市内児玉町太駄の岩上神社の鳥居の袂の一对の石灯籠に中里忠兵衛の名が見られ、郷里の鎮守に石灯籠を寄進していた。

7. 本庄の製糸業

○製糸業の発展

日本の開港以来、蚕種及び生糸の輸出が極めて盛んになった。そのため養蚕を行う農家が増え、本庄市内及び周辺地域は一大養蚕地帯となったことはすでに述べてきたところである。日本の生糸や蚕種の評判が良くなって輸出が増えると、粗製乱造が増え、日本産の製品の品質の低下、輸出の停滞につながり、しいては日本の近代化、富国強兵策に大きな支障となるため、政府も生糸改良に本腰を入れることとなった。新しい製糸技術の導入や生糸製造の取り締まりを強めていった。粗製乱造を防ぎ、海外市場における日本製品の競争力を高めることにあったのである。その中で最も大きな取り組みは器械製糸の導入で、明治5年(1872年)の官営富岡製糸場の建設であった。製糸場で働く工女の出身地を見ると開業後2年間に入所した工女は 長野県180人、入間・埼玉県178人、群馬県170人と、まさに日本の三代養蚕地域から集まっているのである。このことは県北地域も生糸改良への関心の高さを物語っている。彼女らは富岡製糸所で1年前後修業した後、地元に戻り各地の製糸所で指導者的役割を果たしていった。

○座繰製糸

生糸の生産が盛んになると、粗製乱造を防ぎ、品質の向上や均一化のための生糸改良が重要となり、生糸の輸出の競争力を高めるために政府は外国からの技術を導入した器械製糸工場の増加を推進した。養蚕の中心地のひとつ長野県や山梨県では大規模な器械製糸工場が続々と設立され一大製糸工場地帯に発展したが、群馬県と埼玉県では器械製糸工場の進出は遅れ、座繰製糸がその中心で

名称	所在地	製糸機械の種類
若尾製糸場	本庄町	木製器械ケンネル式、座繰
大星館製糸場	本庄町	木製器械ケンネル式
橘館製糸場	本庄町	木製器械ケンネル式
甘楽社有輝組	児玉町	座繰
甘楽社北泉組	北泉村	座繰、足踏、ケンネル式
甘楽社金屋組	金屋村	座繰
甘楽社太駄組	本泉村	座繰
碓氷社本泉組	本泉村	座繰、足踏、ケンネル式
改伸社南江揚場	金屋村	座繰
改伸社小塚揚場	本泉村	座繰、足踏、ケンネル式
改伸社塩谷組	金屋村	座繰

表③ 明治40年の製糸工場



鶴巻製糸工場

工場名	所在地	職工数
大星館製糸所	本庄町	338人
山十組本庄製糸所	本庄町	731人
三井本庄製糸所	本庄町	228人
橘館製糸株式会社	本庄町	481人
鶴巻製糸所	本庄町	53人
信栄館	本庄町	234人
本庄玉蘭製糸株式会社	本庄町	39人
荻原製糸工場	本庄町	44人
本庄製糸工場	本庄町	595人
甘楽社東五十子組	北泉村	26人
甘楽社北泉組	北泉村	15人
競進社製糸所	児玉町	60人
甘楽社本泉組	本泉村	40人
埼玉社秋平組	秋平村	64人
埼玉社本泉組	本泉村	60人

表④ 大正12年の製糸工場

あった。座繰による糸取りは各農家毎に行われたため、品質のバラツキが問題となった。そのため座繰製糸の改良が急務となり実施されていった。農家より集められた生糸を一か所に集めて揚返しという行程を経て品質の調整を行ったのである。

明治13年(1880年)に児玉町に児玉社が設立されたが郡内では最初の座繰製糸場であった。その後、明治30年代前後から、本庄町に器械製糸場が進出して来るが、それらは県外資本の工場が中心であった。高崎線の開通や、長野県内での工場の発展限界などの理由で本庄・深谷・熊谷・大宮に大規模な製糸工場が続々と進出していった。一方、座繰製糸も表③に見られるように群馬県より甘楽社と碓氷社といった組合製糸が進出して、県内の座繰製糸はその組織化に入っている。本泉村(現本庄市児玉町太駄・河内・元田・稲沢)に至っては、碓氷社と甘楽社、さらに改伸社の揚返場が作られている。

○日本鉄道の開通と器械製糸工場の進出

日本鉄道株式会社の高崎線の開通は蚕糸業に大きな変化をもたらした。信州における器械製糸業は大いに発展したが、信州の工場に運び込まれる原料繭の輸送に当時は需要を賄い切れず、それ以上の発展に大きな足かせとなっていた。高崎線の開通は周辺に一大養蚕地帯を擁する本庄・深谷・熊谷駅は信州資本の製糸会社にとって魅力的な地域となり、続々と信州の大規模製糸会社が進出することとなった。

本庄地域への器械製糸工場の進出は明治26年(1893年)に大星館製糸所、36年(1903年)に若尾製糸所、同38年(1905年)には橘館製糸所と続き、同年には信州林組が大星館を買収した。

埼玉県の生糸の産額の推移(『埼玉県蚕糸業史』)をみると明治20年(1887年)の段階では器械製糸が7871貫・座繰製糸が28547貫と圧倒的に座繰製糸が多かったが、明治38年(1905年)には42594貫・37842貫と逆転し、以後は器械製糸に引き離され、明治45年(1912年)には器械製糸が133759貫に対して座繰製糸が48009貫という圧倒的な差となった。明治時代中期以降、生糸輸出の好景気を反映して埼玉県の製糸業は大いに発展したが、明治30年代後半頃からは大規模な器械製糸工場の進出により、生産額は飛躍的に増大し、本庄地域の製糸業は大きなウエイトを占めることとなった。

明治40年(1907年)の市域の製糸工場は表③の通りである。大正期以降の市内の製糸工場については表④の様になる。この表には器械製糸工場と座繰製糸の揚返し工場を含んだものである。両方合わせて15工場が見られる。それが昭和10年頃になると表⑤のようになる。昭和10年代になると市内の製糸工場は18社に増加している。個々の製糸工場には若干の変遷があった。

工場名	所在地
昭栄製糸本庄工場	本庄町
丸庄製糸本庄工場	本庄町
橘館製糸本庄工場	本庄町
宮坂製糸所	本庄町
山信合資会社	本庄町
武州製糸所	本庄町
鶴巻製糸所	本庄町
増沢製糸所	本庄町
森田製糸所	本庄町
沖山製糸所	本庄町
林合資会社	本庄町
丸三製糸所	本庄町
日栄製糸所	本庄町
内山製糸所	本庄町
大島屋製糸所	旭 村
共栄製糸所	児玉町
秋平製糸所	秋平村
根岸製糸所	児玉町

表⑤ 昭和10年頃の製糸工場



製糸工場の内部の様子

8. 養蚕信仰

養蚕が当たるかどうかは農家の収入に大きな影響を持ったことから、養蚕信仰は各地で盛んに行われた。

市内の養蚕農家では“蚕影様”の信仰が広く行われている。蚕影様とは蚕影山神社を意味し、茨城県の筑波山の蚕影山神社がよく知られているが、この地方では二の宮の金鑽神社(児玉郡神川町)の末社の蚕影山神社を信仰する人が多い。市内児玉町飯倉にも蚕影山神社の石碑があり、その信仰の広がりがわかる。児玉町宮内や塩谷の人達は4月16日(蚕影山神社の祭礼日)に蚕影山神社にお参りし、お札をいただいて5月初旬頃の春蚕の時に、蚕室にお札を貼って祀ったという。養蚕の大当たり祈願は蚕影山神社以外でも、長瀨町の宝登山神社に祈願したり、地元の神社に祈願したりした。秋山の十二天社や北堀の東本庄稻荷神社などのお札が残されている。

○繭玉飾り

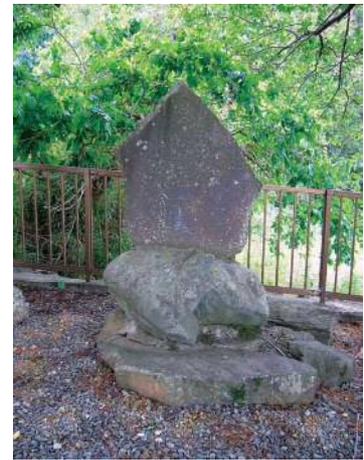
農村では毎年1月14日から15日にかけて繭玉を家の中に飾る行事がある。この期間は小正月といわれ、繭玉を始め色々なものを作り、15日にはあずき粥を焚いて祝いをした。

繭玉を作るのは、作物の豊作を祈願する目的と思われるが、この地域では一般的には養蚕が当たるように願いを込めて飾ったものといわれている。これは一升枧や鍋などの容器に榎・桑・柳・榎などの枝を何本も差し、枝先に粳米の粉から作った球形の団子を差したものである。この米の団子は、繭の形をしたものを付ける場合もあった。飾る場所は一般的に座敷が多く、ここは養蚕の時には蚕室として使われた場所である。台を据えない場所は神棚・大黒柱・土間、さらには庭先に飾る場合もあった。

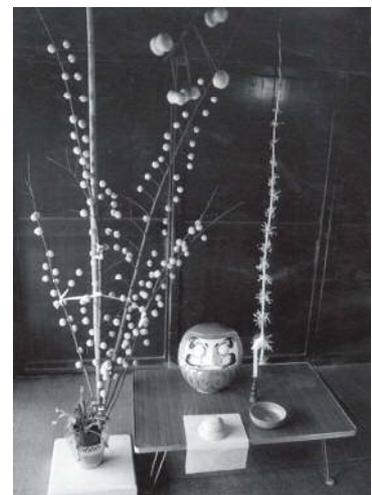
繭玉飾りは市内の養蚕を行っていた家では広く行われた行事で、市内でも地域によって使用する木の種類や飾る場所など色々であった。なお、養蚕は人々の生活に大きな影響を与えたが、家々の年中行事でもその影響が見受けられる。例えばお盆の行事は一般的な大きな行事の一つであるが、旧暦では7月13日から3,4日間行われたが、新暦に移行してからは月遅れの8月13日から16日まで行われるのが一般的となった。しかしこの時期は養蚕の初秋蚕の繁忙期にあたってしまい、養蚕農家では盆の時期をずらすことが行われた。地域によっては9月1日



養蚕信仰のお札



蚕影山神社の碑(本庄市児玉町飯倉)



保木野の繭玉飾り

を盆の初日と定めて実施した地域も多くあり、昭和38年(1963年)には児玉町地域では8月25日を初日と定めた例もある。現在では養蚕が衰退したために、あえて盆の時期を遅らせる必要性がなくなり、8月13日を盆の初日に戻すようになった。このように日本人にとって年中行事の中でも盆の行事は極めて大切な行事であるものながら、大きく時期をずらして行っていたことは、農村部における養蚕がいかに重要な生業であったかを物語っている。

○蚕蛹供養塔

市内大正院境内に1基の供養塔がある。碑面には「蚕蛹供養塔」と刻まれている。裏面には製糸所8社と多くの糸繭商の名が刻まれている。大正12年(1923年)に建てられたもので、当時、大量の蚕が飼育され、多くの蚕の蛹が生糸を取るために処分されたことから、蚕の蛹を供養するために糸繭商の呼びかけにより大正院境内に蚕糸関係者による供養塔が建てられた。

この供養塔の裏面に刻まれた製糸工場は表⑥のとおりである。

このうち1社(大和組神保原製糸所)は上里町地内にあるが、他は旧本庄町地域の7社がこの供養に参加している。大正期にはこの他にも児玉地域にも数社あり、市域内に製糸工場が多数活動していたことがわかるのである。供養塔が造立されて以後、それから毎年5月28日には供養祭が行われたという。しかしながら昭和初期になると、大手製糸場は糸繭商より繭の購入をせずに、直接養蚕農家から繭の購入を行うようになり、廃業に追い込まれた糸繭商が増加した。そのため次第にこの供養祭も行われなくなったという。その後、養蚕業の衰退により製糸工場もなくなり長らく蚕蛹供養祭は忘れられたものとなっていた。平成23年(2011年)5月28日に蚕蛹供養・産業振興祈願祭が大正院本堂で執り行われた。この蚕蛹供養塔は蚕糸業で繁栄した本庄を今に伝える貴重な証人といえる。



大正院境内の「蚕蛹供養塔」

橘館製糸株式会社本庄工場 三井組製糸所本庄支店 今組本庄製糸所 <input type="checkbox"/> 大製糸所鶴巻源吾 大星館林製糸所 信栄館林製糸所 大和組神保原製糸所 富士瓦斯紡績株式会社本庄工場

表⑥ 蚕蛹供養塔に刻まれた製糸工場名

おわりに

以上のように本庄市における蚕糸業の変遷について概説した。しかしながら明治期以降の新聞の紙面は養蚕に関連する記事(蚕況や桑の出来不出来)が毎日の紙面を賑わしており、いかに当時は養蚕の状況が社会に大きな影響を及ぼしたかが推察される。それが戦後、次第に化学繊維の発展、中国産の安価な絹の進出などにより急激に養蚕業が衰退し、それに伴い蚕種・製糸業も衰退した。本庄の市街地周辺部にあった大規模な製糸工場が消えて無くなり、跡地には大型商業店舗等が進出している。農村部では桑畑がなくなり、養蚕家屋が数を減らしていて、養蚕農家もまた無くなってしまった。かつて隆盛を極めた養蚕を始めとする蚕糸業の名残りを示すものは極めて限られたものしか残されていない。農家ではどの家にもあって使われなくなった養蚕具を処分し、養蚕を行っていた痕跡も少なくなりつつある。

本書では一時代を築いた本市の蚕糸業についてごく一面のみをまとめたものに過ぎない。蚕糸業は幕末期から発展し、そして戦後に急激に衰退したわけではない。時代時代で大きな変動があ

り、その時々で多くの人々がその対応に関わってきたのである。養蚕農家は蚕を飼い繭をとり、糸を挽いた。また繭や生糸を出荷し、商人は繭や生糸、絹織物を買って転売した。大きな農家では蚕を飼い蚕の卵を量産し蚕種として海外にまで販売した。糸繭商人は農家から繭を買って製糸工場へ販売した。製糸工場は糸繭商人から繭を買ひ、また直接養蚕農家から繭を買って生糸を生産した。養蚕農家は組合を作り座繰で糸を挽いて、共同の揚返場を作って生糸を生産した。そうやって生産された生糸が日本の重要な輸出品となったのである。生糸や蚕種が高値で売れば増産され、大量生産は粗製乱造をも生み、政府は品質保持のため色々な政策をとり、器械製糸の導入は大規模な資本による大型製糸工場が生まれた。しかしながら従来の座繰製糸も改良され碓氷社や甘楽社のような組合立の共同揚返場による製糸工場も埼玉・群馬県では盛んであった。

この様な複雑な状況を詳細に説明できないため、本書はその変遷の概要のみを触れたものにすぎない。本市における養蚕と製糸の実態は、本書の内容の裏側に多くの出来事や諸問題を含んでいるのである。

なお、本書の刊行にあたり多くの方々から協力を賜わった。

J A ひびきの、藤岡市教育委員会、神川町教育委員会、児玉白楊高等学校を始めとして、写真を提供していただいた皆様、養蚕住宅を調査させていただいた皆様、実際の養蚕状況を見学させていただきまされた皆様など、ご協力を賜わった多くの皆様に紙面を借りてお礼申しあげる。



明治 43 年の本庄町の様子

写真手前を日本鉄道（現高崎線）が通る。線路の向こう左側は市民プラザ跡地で、ここは児玉郡役所や蚕病予防事務所があった。

参考文献

- 田島弥平 『養蚕新論』 『明治農書全集』 第9巻 1872年
中山清夫 『児玉記考』 前編・後編 1900年・1901年
中村高樹 『蚕飼の鑑』 錦玉堂・丸山社 1900年
井上善治郎 『まゆの国』 1977年
逸見茂治 『埼玉県立児玉農業高等学校 校祖木村九蔵先生伝』 1957年
杉 仁 「養蚕改良に生きた人々 ―木村九蔵と競進社―」 『明治の群像7』 三一書房 1971年
松浦利隆 「高山社創成期の研究 - 清温育の成立を中心として -」 『ぐんま史料研究』 第18号 2002年
志村哲・寺内敏郎他 『高山社跡概要調査報告書』 藤岡市教育委員会 2009年
鈴木芳行 『蚕にみる明治維新』 吉川弘文館 2011年
群馬県内務部 『群馬県蚕糸業沿革調査書』 1903年
愛知県農会 『全国篤農家列伝』 1910年
埼玉県 『埼玉県之産業』 1912年
埼玉県 『埼玉県産業案内』 1913年
埼玉県 『武蔵国郡村誌』 第8～10巻 1954年
埼玉県教育委員会 『埼玉県の近代化遺産』 一近代化遺産総合調査報告書一 1996年
埼玉県教育委員会 『競進社模範蚕室修理工事報告書』 1981年
埼玉県教育委員会 『埼玉大正建造物緊急調査報告書』 埼玉県有形文化財調査報告書2 1985年
埼玉県教育委員会 『埼玉県指定文化財調査報告書』 第18集・第19集 1992年・1993年
埼玉県教育委員会 『埼玉県の近代化遺産』 近代化遺産総合調査報告書 1996年
埼玉県史編さん室 『埼玉県史』 通史編5 近代1 1988年
埼玉県史編さん室 『埼玉県史』 通史編6 近代2 1989年
埼玉県史編さん室 『埼玉県史』 通史編7 現代 1991年
埼玉県史編さん室 『埼玉県史』 資料編21 近代・現代3 1982年
横浜開港資料館 『横浜商人とその時代』 有隣新書 1994年
埼玉県立児玉農工高等学校 『創立八十周年記念誌』 1980年
本庄市 『本庄町誌』 1912年
本庄市 『本庄市史』 通史編Ⅱ 1989年
本庄市 『本庄市史』 通史編Ⅲ 1995年
本庄市教育委員会 『本庄市史拾遺』 第1号～第21号 1966年～1990年
本庄市教育委員会 『本庄市の指定文化財』 1968年
本庄市教育委員会 『本庄市の文化財』 1981年
本庄市教育委員会 『本庄歴史缶』 1997年
本庄市立歴史民俗資料館 『本庄市立歴史民俗資料館紀要』 創刊号～第3号 1986年～1992年
児玉町 『児玉町史』 近現代資料編 2002年
児玉町教育委員会 『児玉町の近代化遺産』 児玉町史料調査報告 第18集 2003年
児玉町教育委員会 『写真で見る児玉の歩み』 2005年
本庄市経済環境部農政課 『本庄市の農業』 2012年

本庄市の養蚕と製糸

—養蚕と絹のまち本庄—

平成24年3月28日 初版発行

平成26年3月28日 2版発行

発行 埼玉県本庄市本庄3-5-3
本庄市教育委員会文化財保護課

印刷 山進社印刷株式会社